

# 教育学部・教育学研究科授業評価報告書

2008 年度

京都大学大学院教育学研究科  
部局自己点検・自己評価委員会

## ■はじめに —人材育成の目的と授業評価—

矢野智司(大学院教育学研究科研究科長)

本研究科・学部は「人材育成の目的」を、今年の7月より内規に明記するようになった。少し長くなるが本研究科・学部の「人材育成の目的」を提示しておこう。

まず「教育学研究科の人材育成の目的」について。「本研究科は、教育と人間にかかわる多様な事象を対象とした諸科学を考究することで、理論と実践とを結びつけた心・人間・社会についての専門的に高度な識見ならびに卓越した研究能力を養成し、さらに、広い視野と異質なものへの理解、多面的・総合的な思考力と批判的判断力を形成し、人間らしさを擁護し促進する態度を啓培することで、地球社会の調和ある共存に貢献できる高度な専門能力を持つ人材の育成を目的とする。上記の目的を達成するため、多様かつ調和のとれた教育体系のもと、学生の自発的な研究活動を支援し、理論と実践とを融合し、学際的・国際的なフィールド経験を重視した教育を実現する。」

また「教育学部の人材育成の目的」については次の通りである。「本学部は、教育と人間にかかわる多様な事象を対象とした諸科学を学ぶことで、心・人間・社会についての専門的識見を養成し、さらに、広い視野と異質なものへの理解、多面的・総合的な思考力と批判的判断力を形成し、人間らしさを擁護し促進する態度を啓培することで、地球社会の調和ある共存に貢献できる人材の育成を目的とする。上記の目的を達成するため、多様かつ調和のとれた教育体系のもと、一般教育と専門教育を有機的に関連させながら、高度な一般教育と幅広い専門教育を実現する。」

ところで、本研究科・学部は、このような人材育成の目的にかなった授業を、学生に提示できているだろうか。この学生の授業アンケートは今回で4回目である。今回は前回と同様に講義を中心としているため、アンケートの回答者の多くは学部学生である。学部学生のみからとらえられた授業はどのようなものだろうか。それなりに学生の満足度は高いようだが、私たちは学部教育の現状にたいして危惧を抱いており、現在いくつか改革のアイデアを実現に向けて検討している。そのようなアイデアの実現によって、人材の育成の目的をたんなる言葉にとどまらずこれまで以上に実質化するとともに、学生の満足度がただ高まるのではなく質的に高次なものとなることを目指している。

■はじめに .....	i
■1. 学生による授業評価について	
1.1 教育学部・教育学研究科の授業評価の現状と今回の調査 .....	1
1.2 何のための授業評価か .....	1
1.3 何を評価するか・何を目的とするか .....	2
■2. 授業評価の内容と実施方法	
2.1 「学生による授業アンケート」の構造 .....	5
2.2 実施した授業科目 .....	5
2.3 実施した対象者 .....	6
2.4 実施した日程 .....	6
2.5 具体的な実施手順 .....	6
■3. 「学生による授業アンケート」の結果と分析	
3.1 はじめに .....	7
3.2 アンケートの概要 .....	7
3.3 授業に対する評価 .....	10
3.4 授業へ臨む自己への評価 .....	26
■4. 「学生による授業アンケート」の結果を受けて	
4.1 「学生による授業アンケート」の課題と改善の方向 .....	33
4.2 評価結果のまとめと公表 .....	34
4.3 報告書の利用法と評価 .....	34
■ 資料	
「学生による授業アンケート」集計 ―学部・大学院比較版―	
「学生による授業アンケート」集計 ―文系・理系比較版―	
「学生による授業アンケート」質問・回答用紙	
■ 編集後記	

## ■ 1. 学生による授業評価について

### § 1.1 教育学部・教育学研究科の授業評価の現状と今回の調査

本報告書は、昨年度につづき 4 回目の学生による授業アンケート調査結果の報告書である。前回のアンケートでは、2007 年 3 月に行われた本学部・研究科に対する外部評価で指摘されたいくつかの点をふまえて、実施方法や内容についての工夫が施された。『2006 年度外部評価報告書』に記述されているように、本学部・研究科が「評価の哲学」を探究し独自の評価（方法）を構築しようとする意図に基づいて、学生が主体的に取り組む授業評価、オリジナルな手法による授業評価を行なうという基本姿勢については高い評価を得た。しかし一方で、いくつかの課題も指摘されている。共通して挙げられているのは、アンケートに参加する学生数の少なさと回収率の低さであり、それと関連して演習・ゼミナール形式に限定することへの疑問であった。これらの指摘を受けて、前回調査では回収率をあげることに、調査対象にする授業を演習・ゼミナール形式から拡大すること等が具体的に検討され、対象科目を講義科目にすること、アンケートに先立って担当教員に十分なオリエンテーションを行なうこと、実施時にマークシート部分と自由記述部分を別々にして回収すること等の工夫と対応が講じられた。

今回の調査ではこのような経過をふまえて、基本的に前回の方針を踏襲しつつ新しい視点を加えた授業評価アンケートを実施した。調査対象は前回と同じ講義科目とし、2 種類の回答（マークシート部分と自由記述部分）を含んだ質問票を作成した。実施に先立って授業担当者に実施方法を説明した上で、授業担当者の授業中にアンケートを行なった（調査概要の詳細については「§ 2. 授業評価の概要」を参照）。

以下、このアンケートの基本的なコンセプトについて改めて記載しておきたい。（今回の授業アンケートは、基本的に昨年と同じ様式のものであるため、以下の「§ 1.2 何のための授業評価か」「§ 1.3 何を評価するか・何を目的とするか」は昨年とほぼ同じ内容である）。

### § 1.2 何のための授業評価か

一般に学生による授業評価は、授業の改善を目的としてなされるものである。また同時に、授業評価は、学生にとっても授業を振り返ることで自身の体験や経験への自覚が深まることが指摘されてきた。この場合、授業内容に関する認識の反省と、その授業を受けることでの自己の変化についての反省の 2 つを意味していた。ところで、本学部・研究科の学問の研究対象は「教育」であり、このことから本学部・研究科が授業評価をするとき、これらの目的とは別に他の学部・研究科とは異なる目的が加わることになる。

他の学部・研究科においては、数学や経済学がそうであるように、授業評価は達成すべき教育の目標とは外的な関係にあり、教員にとっても学生にとっても授業評価は授業内容とは直接に関係がない。それに対して、「教育」そのものが授業内容を構成する本学部・研究科においては、この関係は内的であり自己言及的な関係にある。命題的にいえば、私

私たちは教育について教育している。私たちは学生の教育にたいする反省の力・考察の力を教育することを目的としている。学生が授業のなかで、教育とは何か、授業とは何か、知の伝達とは何か、さらには評価の技術、評価の心理学的基盤、評価の歴史、評価の社会的機能・国際比較、評価という制度といったことを、さまざまな学問的手法によって捉え直すことが目指されている。

このことを自覚するとき、私たちが実施しようとする授業評価に、この本学部・研究科の授業における特殊な関係が構造化される必要があると考えた。つまり単に授業評価をするだけではなく、同時に学生に教育・授業・評価とは何かを反省させ、学生の評価の力を養成することもまた授業評価の目的となる。そしてそのように養成された学生の評価力によって評価されることで、翻って教員自身の教育についての理論と実践のあり方が再形成されることになる。さらに、授業評価は授業を問うので終わらず、また授業のなかで改めてこのような授業評価とは何かそれぞれの問題意識から問われることになるだろう。このような循環的な視点をもつことではじめて本学部・研究科の授業評価となるだろう。

### § 1.3 何を評価するか・何を目的とするか

部局自己点検・評価委員会は、以上のような本学部・研究科の研究と教育の特質を踏まえた上で、京都大学の授業評価において使用された調査票や、その他の既成の授業評価調査票などを収集し比較検討しながら、改めて本学部・研究科の授業評価において何を問うべきかについて慎重に議論した。

小学校・中学校・高校といった学校の授業においては、各教科において到達すべき達成目標が決まっており、教科書を手がかりに授業を段階づけて進めることができる。それに対して、本学部・研究科の授業の多くは、小・中・高の学校の授業とは異なり、到達すべき達成目標を予め決めることができないものに関わっている。もちろん学問研究に不可欠な知識の伝達は、本学部・研究科のどの授業のなかにもあるし、また段階づけられた知識や技術の積み重ねが重視される授業もある。これまでの学説や歴史を正確に理解させることは授業において重要な課題である。しかし、このような側面は授業の一部をなすものでしかない。人間の教育を探究する本学部・研究科の理念から見ると、このような知識を十分に身につけるとともに、その知識をもとに一人ひとりの学生が、人間についての謎に出会うことや、教育ということの事象の深さに気づくこと、人と向かい合う自己のあり方への反省をもつこと、あるいは歴史的・社会的・制度的文脈のなかで具体的に問題を発見し捉えることなどが授業では重要である。

このように考えるとき、本学部・研究科では既成の授業評価調査票で問われるような評価の問いは妥当しない。例えば、「シラバス通りに授業をしたか」などの評価は2次的であり、むしろシラバスを逸脱してでも授業の流れのなかで、学生の自覚や反省が深まることの方が重要である。「わかりやすい授業であったか」は、「わかる」ということが学生の既存の知識体系に無理なく収まるようなことを意味しているとするなら、やはり2次的

なことである。学生の既存の枠組みを揺さぶり、新たな疑問や謎を感じさせ、自ら考えたり調べたりするようになる授業が「わかりやすい」授業などではありえないだろう。

それではどのような設問をすべきだろうか。もっと客観的な設問を設定すべきだろうか。評価を客観的なものに近づけようとする、「授業の開始と終了は時間通りでしたか」のように、たしかに客観的ではあるがほとんど無意味ともいえるべき設問となる。むしろ本学部・研究科の授業の目的が先に述べたようなものであるなら、評価はどこまでも主観的なものであることを自覚して設問を設定する方がよいと考えた。

以上のような授業観・評価観に立つとき、学生自身が自分にとってその授業に「満足しているか」、その授業から「得たものがあるか」、その授業は「役に立ったか」と反省することは、シンプルではあるが重要だと考えた。私たちはこの結果から授業が学生にとってどのように受け止められていることを知ることができる。しかし、私たちは受講した学生の満足度が高いからといってその授業が優れていたことを示すものとは考えない。また反対に満足度が低いからといってその授業が問題があるとも考えない。ここでは満足の質や理由がわからないからだ。それでもこのような設問は教員によってそれぞれの授業観と照らし合わせて結果を解釈し、自分の授業を捉え直すためには有益であるにちがいない。今回の評価の対象とする授業は、これまでの演習・ゼミナール形式の授業ではなく講義形式の授業ではあるが、その講義において学生の授業への自己の向上への期待・その達成感・心がけていることなどを自己評価してもらおうと考えた。当然このような設問から学生は教員が授業の構造をどのように捉えているのか、学生に対してどのような授業態度を期待しているのか、などを読み取るはずであり、またそのことを期待もしている。

そこで「学生による授業アンケート」は、次の3つのパートに分けて評価することになった。それぞれのパートが目指した評価については、次の■2で具体的に紹介する。



## ■ 2. 授業評価の内容と実施方法

### § 2.1 「学生による授業アンケート」の構造

以上のような授業評価の目的を踏まえ、授業評価調査票（授業アンケート）は、形式的には実施の都合上、回答用紙 A と B の 2 枚に分かれている。これらは、大きく分けて「授業に対する評価」および「授業に臨む自己への評価」といった内容をそれぞれカバーしている。なお、具体的な質問項目は大きく次の 3 つのパートに分かれている。それぞれのパートの調査項目が目指す評価は以下の通りである。（本報告書末の資料を参照）

第 1 部（問 1 から問 4） マークシート方式による回答可能な質問および補足的な自由記述。（回答用紙 A）

第 2 部（問 5 から問 7） 学生が授業に向かう態度を理解し、また学生自身に「振り返り」の機会を与えるために適切な問いを設定し、その問いに対して自由記述で答えさせる。（回答用紙 B）

第 3 部（問 8 から問 9） 各授業へのフィードバックとしての自由記述と本授業アンケートに関する質問項目および自由記述。（回答用紙 B）

本報告書においては、回答用紙 A と B にそれぞれ対応する「授業に対する評価」および「授業に臨む自己への評価」に分けて調査結果を報告する。

### § 2.2 実施した授業科目

昨年度に引き続き、今回も講義形式の授業を調査することにした。講義形式の授業には「概論」が多く、学部教育において基礎的な知識の伝達と学問への関心を深める重要な意義を持っている。また教員免許・社会教育主事などとの関係で科目によっては教育学部外の学生も多数受講しており、教員養成の機能としても重要な意義を持っていると考えられる。実施者と実施した授業科目名は以下の通りである（以下、順不同・敬称略）。

#### 【実施者】

齊藤 智・子安増生・楠見 孝

西平 直・楠見 孝・杉本 均

高見 茂

駒込 武

金子 勉

西岡加名恵

大山泰宏

渡邊洋子

西平 直

#### 【実施科目名】

メディア教育概論

教育研究入門Ⅰ

教育行政学概論Ⅰ

教育史概論Ⅱ

教育法学

社会科教育法Ⅰ

人格心理学概論Ⅰ

生涯学習概論Ⅰ

臨床教育学概論Ⅰ



### § 2.3 実施した対象者

上記授業に出席した学生・院生・聴講生・科目等履修生・その他

### § 2.4 実施した日程

授業の評価ということでは授業の最終日が最適だろうが、回収に時間がかかることも考慮し、実施は授業終了日に近い6月23日から7月4日の期間とした。

### § 2.5 具体的な実施手順

「学生による授業アンケート」実施要項として以下のような教示を担当教員に与え、授業のなかで担当教員から学生に問題用紙、AとBの2種類の回答用紙、回収用封筒を配布した。学生のアンケートへの関心を高めるために、また学生への調査結果のフィードバックのために、アンケートの実施にあたり、口頭で前回の調査結果が教育学部・教育学研究科のホームページに掲載していることを学生に伝えてもらった。

なお授業によって授業時間内で回答したものと、持ち帰ってもらい回答したものとがある。持ち帰ったものは、7月11日までに封筒に入れてもらい回収した。

#### 「学生による授業アンケート」実施要項

- 今回の調査の対象となるのは、この「**講義**」の**授業**です。全員に記入してもらうことが望ましいのですが、決して、強制はしないで下さい。
- この封筒の中には、問題用紙、**回答用紙AとBの2種類**、回収用封筒が入っています。これらが足りない場合には、事務のカウンターから必要部数をお取り下さい。
- アンケート記入に必要な時間はおよそ30分程度です。**回答用紙Aは必ずその時間内で回収してください**。解答用紙Bは授業時間内に記入時間が取れない場合には、持ち帰らせて下さって結構です。
- 記入が終わったら、**回答用紙AとBをそれぞれ別にして、回答用紙Bのみ**回収用封筒に入れて封をした上で教員に提出するよう学生に指示して下さい。

## ■ 3. 「学生による授業アンケート」の結果と分析

### — 授業に対する評価と自己への評価

#### § 3.1 はじめに

本年度(2008 年度)は、前期開講の「講義」の授業を対象として授業アンケートを実施している。昨年度(2007 年度)の授業アンケートでは後期開講の「講義」科目を対象としていたので、そこで得られた結果が安定してものであるのかどうか、検討することが本年度の調査の1つの目的である。前年度の結果との比較が必要である場合には、前年度のデータも適宜報告し、参考とした。

昨年度は、教育学部において「文系・理系」に分かれての入試が導入された年であり、この観点からの分析が昨年度の報告で試みられている。結論から言えば、本年度の結果を見る限り、文系入試による学生と理系入試による学生の間に大きな違いは見られないため、本章では、違いが見られた項目についてのみ報告し、その他のデータについては巻末に資料として掲載した。また、本年度は、授業アンケートに回答した大学院生の受講生数が少なかったため、学部生と大学院生を別々にしたデータもまた、巻末に資料として掲載するにとどめている。

新しい試みとして、本年度は、質問項目間の関係を検討した。このことにより、ある質問項目にある特定の回答を示した受講生が、他の質問項目に対してどのように回答しているのかを知ることができ、受講生の性質を分析することが可能となる。

以下では、「§ 3.2 アンケートの概要」につづいて、回答用紙 A のデータに基づく「§ 3.3 授業に対する評価」および回答用紙 B のデータに基づく「§ 3.4 授業に臨む自己への評価」に分け、分析結果を報告する。

なお、アンケートの実施から回収、資料・データの整理には中池竜一助教の助力を得た。

#### § 3.2 アンケートの概要

今回アンケートを実施した授業の数は 9 である。回答用紙 A (問 0～問 4) の回収数は、360 枚 (そのうち 2 枚は記入の不備により分析から除外) で、平均回収率は 95% であり、回答用紙 B (問 5～問 9) の回収数は 317 枚 (そのうち 5 枚は記入の不備により分析から除外) で、平均回収率は 84% であった。授業ごとの回収率を表 1 に示す。これから明らかのように、マークシート方式の回答用紙 (回答用紙 A) については全般的に回収率が高い。記述式の回答用紙 (回答用紙 B) については、授業によって回収率にばらつきが見られた。

なお、今回のアンケートに応えた学生の「所属」「回生」「性別」を、昨年度(2007 年度)のアンケートの結果と並べて、それぞれ図 1、図 2、図 3 に示す。

所属については、昨年度と同様教育学部・教育学研究科がもっとも多く、続いて、文学部、理学部と続く。また、昨年度よりも文学部の学生が多いこともわかる。回生については、アンケート対象の授業が概論などの講義であることを反映して、学部生がほとんどを

占め、特に2回生が多い。性別については、2007年度に比べてやや女性が多くなっており、無回答も若干増えている。

表1 授業別回収率

授業名	配布数	回答用紙 A		回答用紙 B	
		回収数	回収率	回収数	回収率
授業1	45	45	100%	45	100%
授業2	14	14	100%	14	100%
授業3	50	49	98%	49	98%
授業4	21	15	71%	11	52%
授業5	76	65	86%	64	84%
授業6	33	33	100%	33	100%
授業7	57	57	100%	57	100%
授業8	20	20	100%	19	95%
授業9	62	62	100%	25	40%
<b>計(平均)</b>	<b>378</b>	<b>360</b>	<b>(95%)</b>	<b>317</b>	<b>(84%)</b>

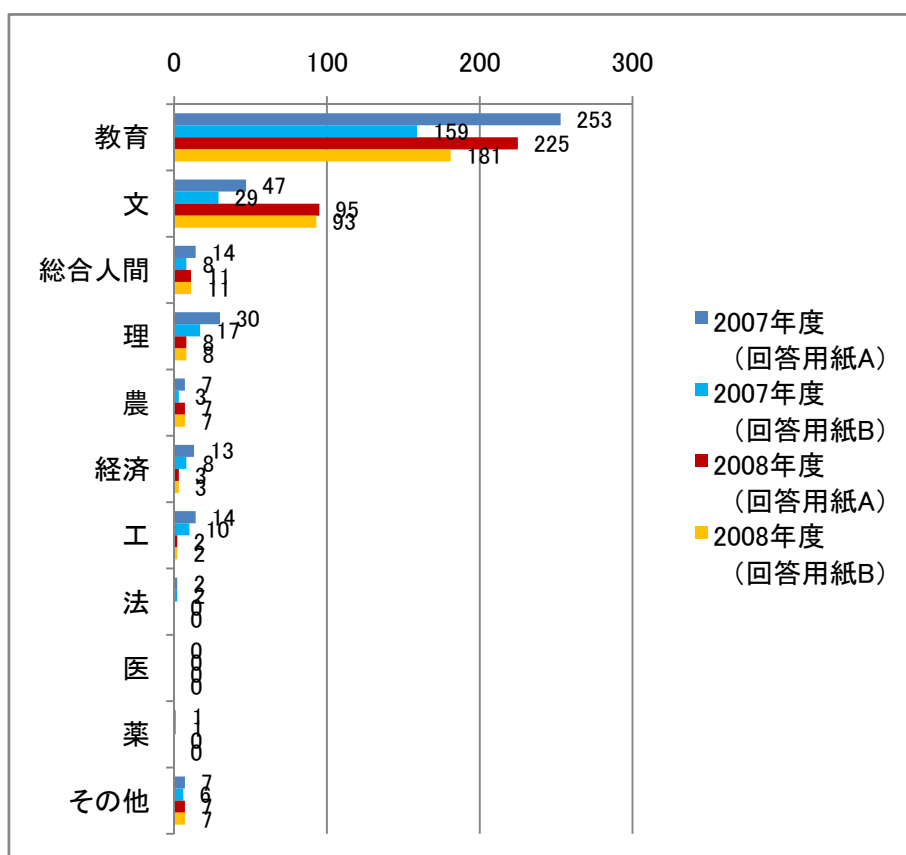


図1 回答者の所属 (2007・2008年度)

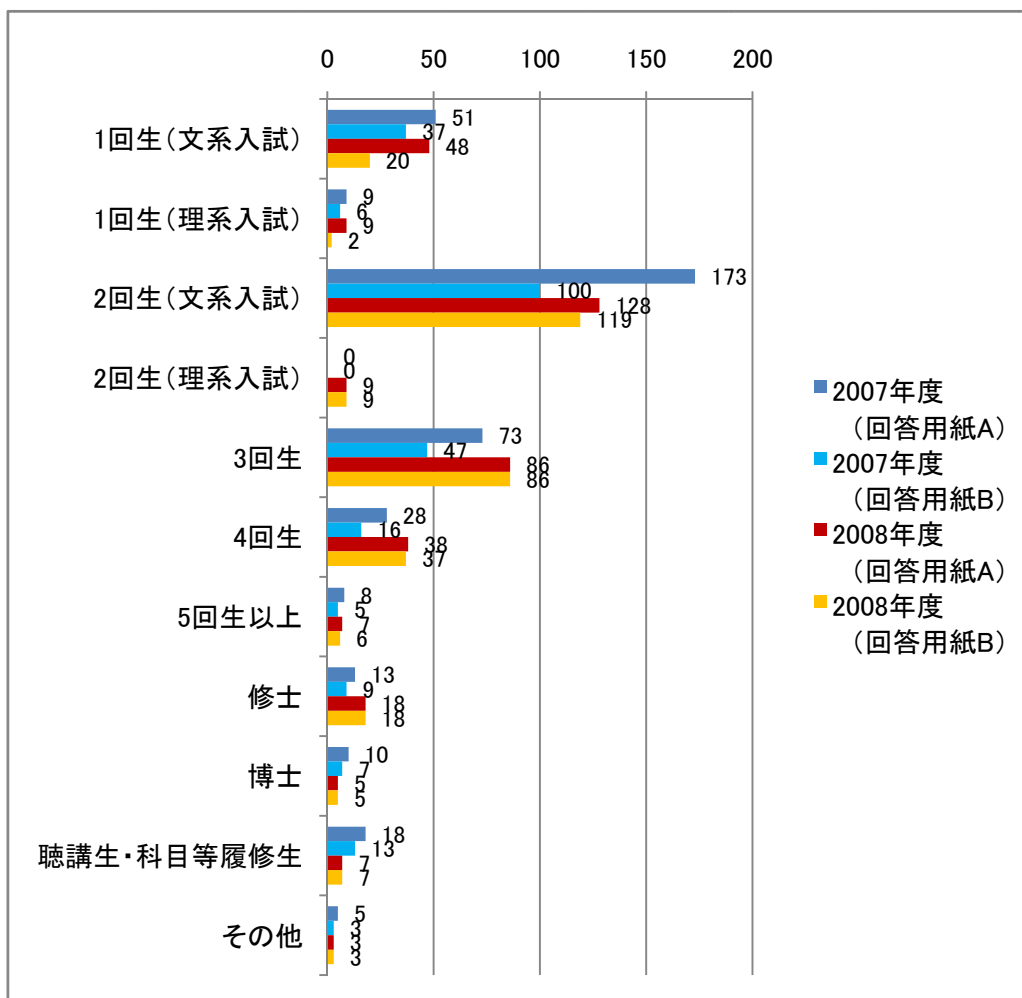


図2 回答者の回生（2007・2008年度）

（2007年度のアンケート実施時点では、理系科目入試は1回生のみである）

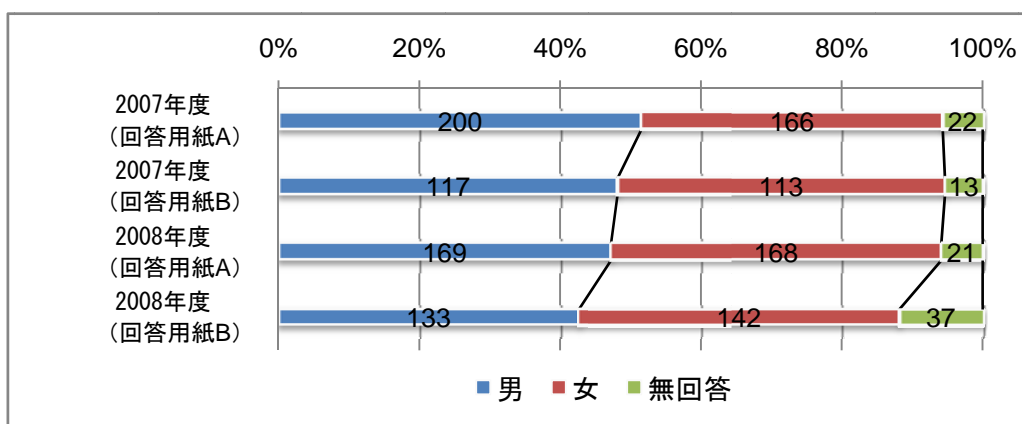


図3 回答者の性別（2007・2008年度）

### § 3.3 授業に対する評価

ここでは、主として授業に対する評価について尋ねた回答用紙 A から得られた結果を報告する。回答用紙 A の配布総数は 378 部、内 360 部が回収され、回収率は 95%であった。なお、記入漏れのあった 2 件は除いて、残り 358 件を分析対象とした。なお、参考となる場合には、昨年度の結果（講義科目の調査結果）をあわせて報告している。

#### 問 1 の分析結果

問 1 では、「この授業について、満足している／得たものがある／役に立った」という点について、あてはまるか、あてはまらないかについて尋ねた。この結果を表 2、図 4 に示した。「満足している」については、「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」と回答した者が約 80%であり、また、「得たものがある」については、これらの回答をした者が約 85%であった。昨年度と同様に大変肯定的な結果が得られているといえよう。「役に立った」については、「あてはまる」と「どちらかといえばあてはまる」という回答が 60%弱となっているが、昨年度は 70%弱であり、「満足している」、「得たものがある」と比較するとやや低い傾向が見られていると言えよう。

この点と関連して、本年度は、「役に立った」という項目に対して「あてはまる」か「どちらかといえばあてはまる」という回答した場合に、その具体的な内容の記述を求めた。該当者は 220 名であったが、この欄に回答したのは 81%にあたる 179 名であった。回答内容としては、

- 「...の知識を得る事ができた」、
- 「...に対する考え／理解が深まった」、
- 「...という学問／視点を知ることができた」

という授業の具体的内容に関わるものに加え、

- 「関心を広げることができた」、
- 「視野／価値観が広がった」、
- 「知る感動があった」、

などのように、全般的な事柄に関するものが多く見られた。

なお、「あてはまる」から「あてはまらない」の 5 つの選択肢をそれぞれ 1 点から 5 点として得点化し、各質問項目同士の相関を確認したところ、「満足している」と「得たものがある」の間には、 $r = .75$  という高い相関が見られ、これらの項目と「役に立った」の間の相関は、それぞれ .63 と .68 であった。「満足している」と考える学生の多くは「得たものがある」と考えている傾向が比較的強いが、これらの項目への肯定的な反応は、「役に立った」という反応と直結してはいないようである。

表2 問1-(1) 満足している・得たものがある・役に立った

	満足している	得たものがある	役に立った
あてはまる	139	166	111
どちらかといえばあてはまる	146	139	99
どちらともいえない	49	34	118
どちらかといえばあてはまらない	15	13	21
あてはまらない	9	6	7
未記入	0	0	2
<b>計</b>	<b>358</b>	<b>358</b>	<b>358</b>

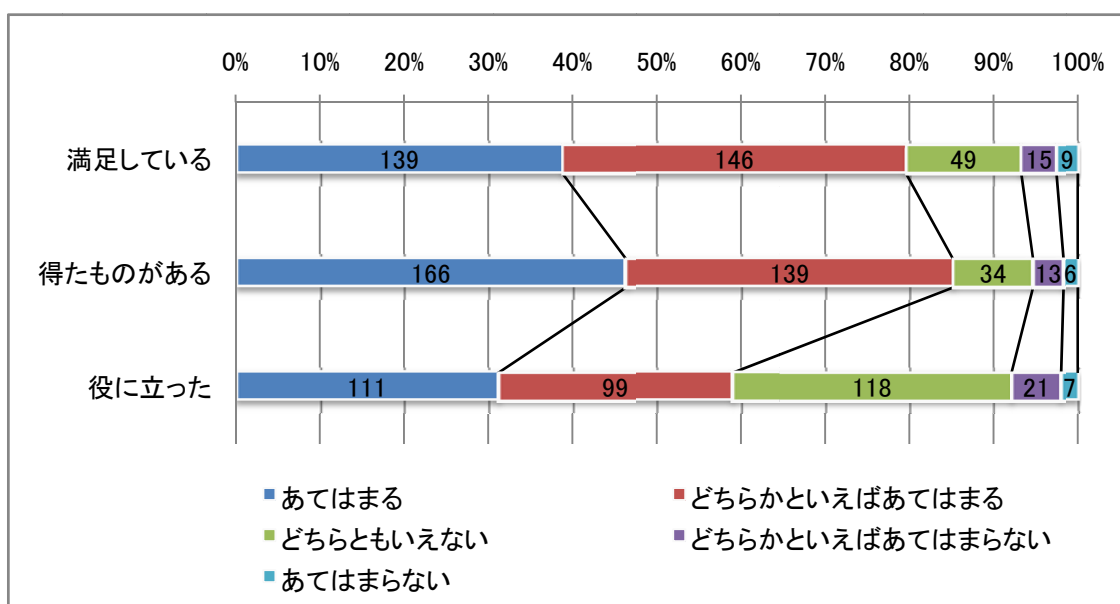


図4 問1-(1) 満足している・得たものがある・役に立った

## 問2の分析結果

問2は、「この授業についてあてはまるもの」を回答数に制限を加えず選択させたものであり、この結果を、表3と図5に示す。それぞれに本年度（右）と昨年度（左）のデータを比較のために示している。

この問いにおいても、昨年の講義科目におけるアンケート結果と類似した結果が得られており、「おもしろかった」、「考えさせられた」、「考えが深まった」、「熱意が伝わった」、「視野が開けた」などの肯定的項目が上位にならんでいる。否定項目のうち最上位にあるのは「むずかしかった」であり、これも昨年と同様である。昨年の講義科目ではほとんど選択されなかった「負担が大きかった」という項目を、本年度は52名が選択しており、講義の

スタイルや課される課題の性質など、各授業固有の特徴が、それぞれの項目の選択に与える影響があると推測される。ただし、「むずかしかった」、「負担が大きかった」といった項目は、確かに否定的な項目ではあるが、難しさや負担の大きさは、その結果得られるものとの関係において評価されるべきであって、このような項目の選択者が比較的多く存在することそれ自体は、否定的にとらえるべきではないかもしれない。この点については、次の分析において再度検討する。

表3 問2 この授業についてあてはまるもの (回答数無制限)

(2007年度(左)と2008年度(右)のデータ)

問2「この授業は」	2007年度	問2「この授業は」	2008年度
おもしろかった	244	おもしろかった	201
考えさせられた	212	考えさせられた	183
視野が開けた	162	考えが深まった	151
考えが深まった	157	熱意が伝わった	140
熱意が伝わった	139	視野が開けた	119
興味にあっていた	126	興味にあっていた	104
認識が変わった	123	惹かれたものがある	98
惹かれたものがある	122	むずかしかった	81
むずかしかった	64	認識が変わった	79
たいくつだった	31	負担が大きかった	52
ついていけなかった	22	たいくつだった	40
なじめなかった	21	なじめなかった	25
ありきたりだった	17	つまらなかった	24
つまらなかった	13	ありきたりだった	14
負担が大きかった	4	ついていけなかった	13

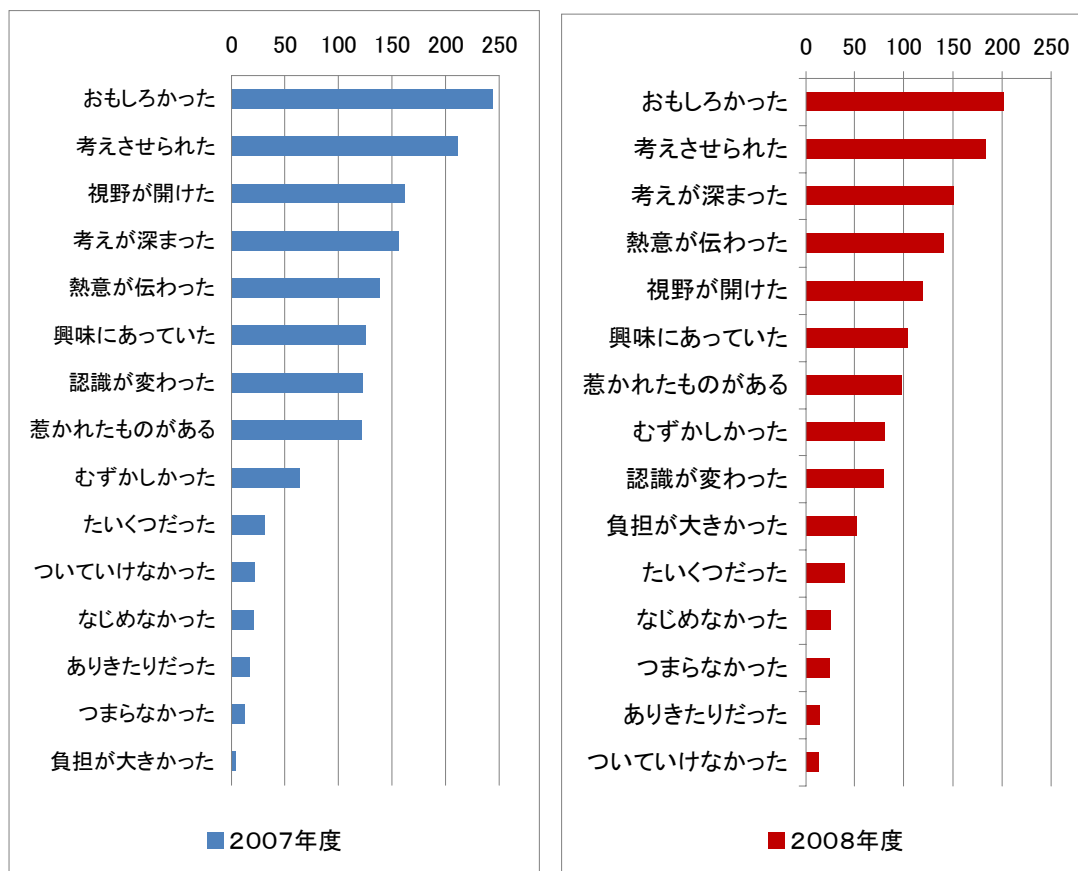


図5 問2 この授業についてあてはまるもの (回答数無制限)  
(2007年度(左)と2008年度(右)のデータ)

「§3.1はじめに」で述べたように、本年度は教育学部において「文系・理系」に分かれての入試が導入されて2年目にあたる。そのため、昨年度よりは理系入試で入学した学生の数が多いが、文系入試と理系入試別の分析からは、それほど大きな違いが両者には見られていない(巻末の参考資料を参照)。ただし、この問2に関しては、文系入試の学生と理系入試の学生によって若干の違いが見られるようなので、ここに報告する。図6を見るとわかるように、文系入試学生では、「おもしろかった」、「考えさせられた」、「考えが深まった」という順に選択者数が多いが、理系入試学生では、「考えさせられた」、「おもしろかった」、「考えが深まった」という順に選択者数が多く、かつ、「考えさせられた」という反応の割合が比較的高い。明確な結論が出せるほど理系入試学生の人数は多くないので、こうした違いが真に入試科目の違いによって生まれてきているのかどうか、今後検討していく必要があるであろう。



表 4 問 2 「この授業について当てはまるもの」(回答数無制限)

(文系入試学生(左)と理系入試学生(右)のデータ)

	文系入試	理系入試
おもしろかった	67	8
つまらなかった	13	0
考えさせられた	65	14
むずかしかった	23	5
考えが深まった	50	8
負担が大きかった	6	0
認識が変わった	23	3
たいくつだった	20	2
興味にあった	35	5
ありきたりだった	7	0
視野が開けた	37	6
なじめなかった	4	0
熱意が伝わった	31	7
ついていけなかった	2	2
惹かれたものがある	32	5

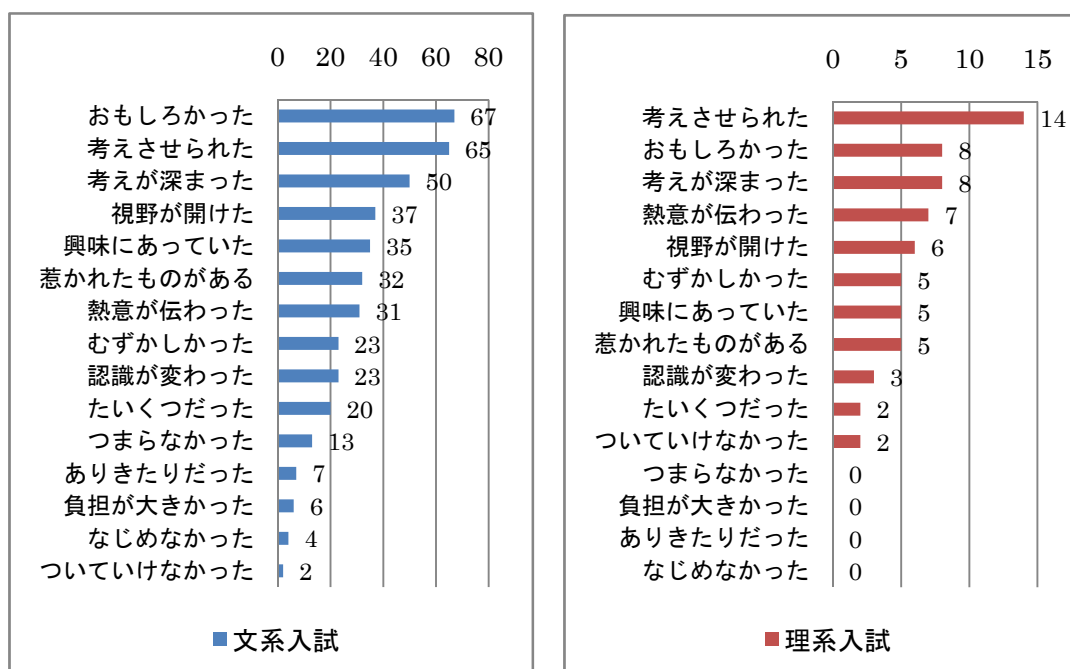


図 6 回答用紙 A : 問 2 この授業についてあてはまるもの (回答数無制限)

(文系入試学生(左)と理系入試学生(右)のデータ)

## 問1と問2の関係について

ここでは、問2においてそれぞれの選択肢を選んだ回答者が、問1「この授業について、満足している／得たものがある／役に立った」という点について、どのように回答しているのかを分析した。表5、6、7は、それぞれ、問1の「満足している」かどうか、「得たものがある」かどうか、「役に立った」かどうかの回答者数を問2の選択項目別に示している。図7、8、9は、それぞれ、回答者の割合を示した。

表5と図7から明らかなように、問2において、「おもしろかった」、「考えさせられた」、「考えが深まった」、「自分の興味にあった」、「熱意が伝わった」、「視野が開けた」、「惹かれたものがある」など、肯定的な項目を選択した学生のうち90%前後は、その授業に満足しているということがわかる。また、重要な点として、否定的項目である「むずかしかった」を選択した学生の80%以上が、満足しているかどうかの問いに対して、「あてはまる」あるいは「どちらかといえばあてはまる」と回答していることが注目される。先に述べたように、難しいという反応は、必ずしも否定的なものとしてとらえられるべきでなく、ある程度の困難さは、それを超えて理解へ向かう動機づけ、ならびに理解できた時の達成感などと結びつき、授業参加への満足感を高める可能性が示されていると言えよう。一方で、「たいくつだった」というような項目の選択者では、満足しているという回答が多くないことから、少なくとも本調査の対象となった受講生については、ある程度「噛み応えのある」授業を求めているといえるのかもしれない。

表6と図8もまた、問1と問2に強い関連があることを示している。問2において、「おもしろかった」、「考えさせられた」、「考えが深まった」、「自分の興味にあった」、「熱意が伝わった」、「視野が開けた」、「惹かれたものがある」など、肯定的な項目を選択した学生の90%以上が、その授業から得たものがあるかどうかという問いにおいて、「あてはまる」あるいは「どちらかといえばあてはまる」と回答している。ここでも、否定的項目「むずかしかった」を選択した学生の80%以上が、得たものがあると回答していることが示されている点が興味深い。この点は、「満足しているかどうか」と「得たものがあるかどうか」という問いが、類似した反応を導いているという問1の分析結果を支持している。

表5 問2「この授業について思ったこと」×問1「満足しているかどうか」

選択肢	1(あてはまる)	2(どちらかといえ ばあてはまる)	3(どちらとも いえない)	4(どちらかといえ ばあてはまらない)	5(あてはまら ない)
おもしろかった	122	70	7	1	1
考えさせられた	81	76	20	4	2
考えが深まった	76	58	13	2	2
自分の興味にあっていた	71	29	1	2	1
熱意が伝わった	70	53	11	5	1
視野が開けた	69	42	7	1	0
惹かれたものがある	61	31	3	1	2
認識が変わった	41	30	5	2	1
むずかしかった	31	34	11	4	1
負担が大きかった	9	24	10	4	5
ついていけなかった	3	5	3	2	0
ありきたりだった	1	7	3	2	1
つまらなかった	0	2	8	9	5
たいくつだった	0	10	16	10	4
なじめなかった	0	7	9	3	6

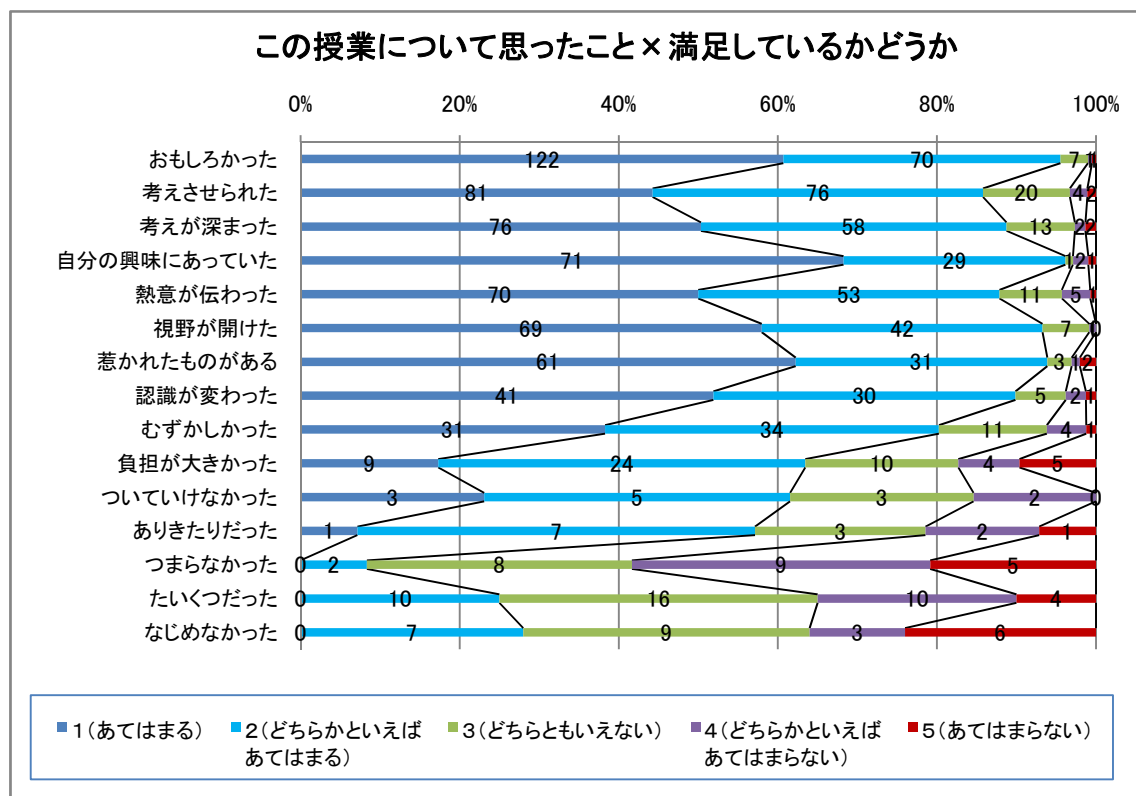


図7 問2「この授業について思ったこと」×問1「満足しているかどうか」

表 6 問2「この授業について思ったこと」×問1「得たものがあるかどうか」

選択肢	1(あてはまる)	2(どちらかといえばあてはまる)	3(どちらともいえない)	4(どちらかといえばあてはまらない)	5(あてはまらない)
おもしろかった	135	60	6	0	0
考えさせられた	101	67	13	1	1
考えが深まった	89	55	6	1	0
自分の興味にあっていた	78	24	2	0	0
熱意が伝わった	77	50	8	3	2
視野が開けた	78	38	3	0	0
惹かれたものがある	77	20	1	0	0
認識が変わった	51	24	2	1	1
むずかしかった	42	27	9	1	2
負担が大きかった	18	22	3	4	5
ついていけなかった	4	5	2	0	2
ありきたりだった	1	6	2	4	1
つまらなかった	0	9	5	6	4
たいくつだった	3	15	10	8	4
なじめなかった	0	11	7	3	4

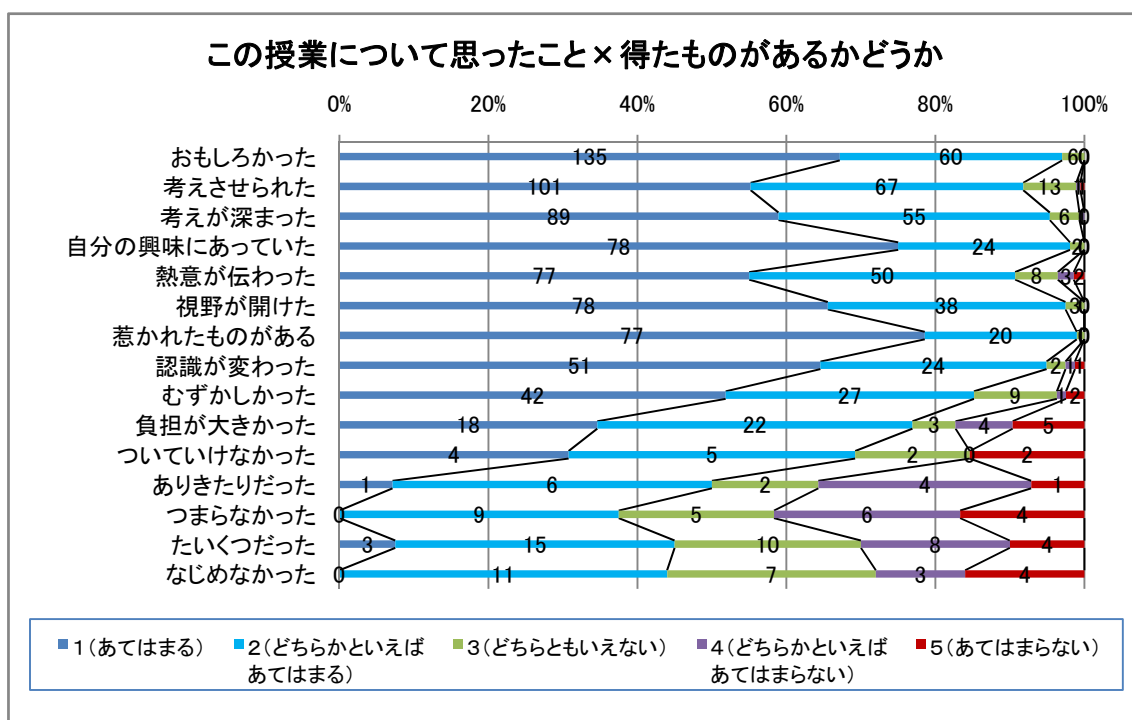


図 8 問2「この授業について思ったこと」×問1「得たものがあるかどうか」

これに対して表7と図9は、問2において肯定的な項目を選択することが、その授業が「役に立った」という反応と必ずしも結びついているわけではないことを示している。問2において、「考えさせられた」、「考えが深まった」、「熱意が伝わった」、「視野が開けた」、「惹かれたものがある」といった肯定的項目を選択した学生のうち、その授業が役に立ったと回答したのは70%以下であった。全体的に見ると、問2で肯定的な項目を選択した場合には、否定的な項目を選択した場合よりも、役に立ったかどうかという問いに対して、「あてはまる」あるいは「どちらかといえばあてはまる」と答える傾向が強いが、その傾向は、満足しているかどうか、得たものがあるかどうかという問いで見られるものより弱いといえよう。

以上をまとめると、問2における肯定的項目の選択は、授業の満足度や授業から得たものがあるかどうかといった主観的評価と深く関連している。また、一見否定的である「むずかしかった」という項目の選択もまた、授業の満足度や授業から得たものがあるかどうかといった反応と関連していることがわかった。「むずかしいこと」それ自体は否定的なものではなく、むしろ、授業内容が高度であるということの現れであるとともに、知的好奇心や意欲に裏打ちされた受講生の授業態度との相互作用によって学習効果を高める可能性がある1要因であるといえよう。一方で、こうした要因と当該の授業が何らかの役に立つと受け止められるかどうかは比較的独立していると考えられることができるようだ。この点は、問1の分析結果とも整合する。

表7 問2「この授業について思ったこと」×問1「役に立ったかどうか」

選択肢	1(あてはまる)	2(どちらかといえばあてはまる)	3(どちらともいえない)	4(どちらかといえばあてはまらない)	5(あてはまらない)
おもしろかった	93	55	50	3	0
考えさせられた	68	51	56	5	1
考えが深まった	58	44	45	3	0
自分の興味にあっていた	53	24	26	1	0
熱意が伝わった	52	42	33	10	2
視野が開けた	51	29	37	1	0
惹かれたものがある	46	20	28	4	0
認識が変わった	40	17	21	0	1
むずかしかった	24	18	33	5	1
負担が大きかった	10	18	13	6	5
ついていけなかった	1	3	7	1	1
ありきたりだった	1	2	6	3	2
つまらなかった	0	4	9	7	4
たいくつだった	0	8	19	9	4
なじめなかった	1	4	12	4	4

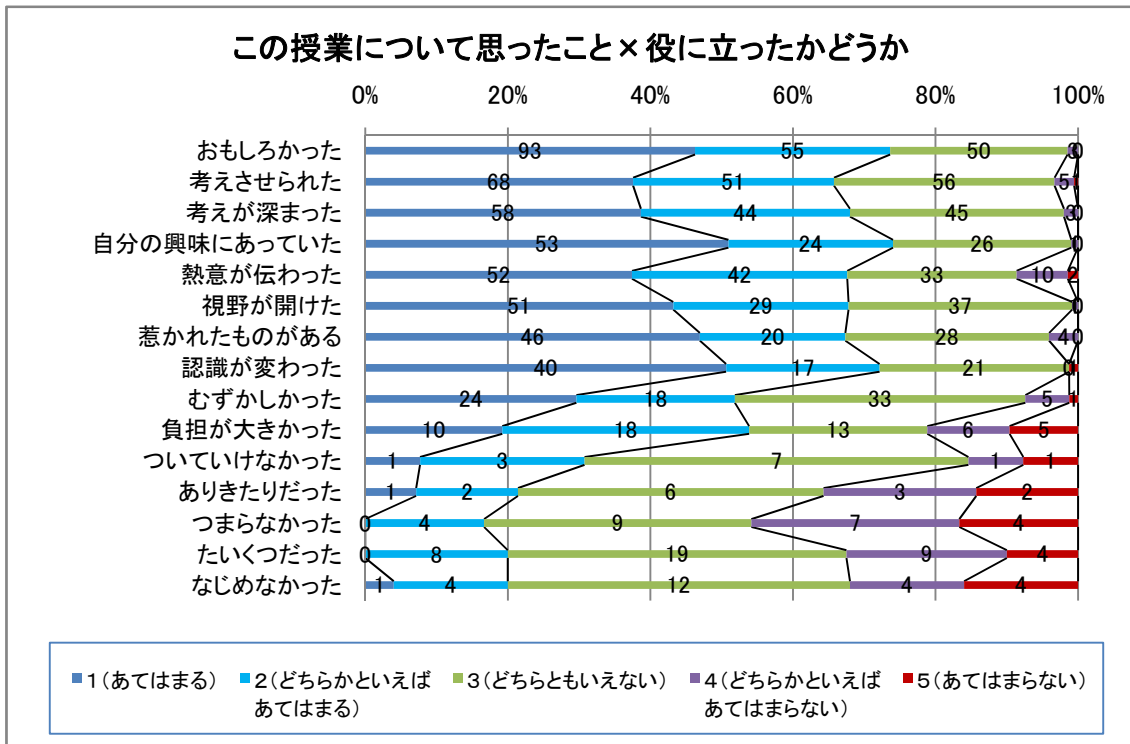


図9 問2「この授業について思ったこと」×問1「役に立ったかどうか」

### 問3の分析結果

問3は、「この授業について『最も期待すること』、『次に期待すること』」を尋ねたものである。表8と図10から明らかなように、「『最も』当てはまる」では、「知識や理解を深められる」を選択した学生が最も多く、「必要な方法論を身につけられる」、「自分の問題意識を磨ける」、「多面的な考察ができる」、「最新動向に触れられる」という順で選択者が多い。昨年の講義科目での調査結果でも、「知識や理解を深められる」を選択した学生が最も多かったが、その後の順位は、「自分の問題意識を磨ける」、「多面的な考察ができる」、「最新動向に触れられる」、「必要な方法論を身につけられる」となり、方法論に関する意識が本年度は高いといえよう。この理由は明らかではないが、特定の授業の影響があるのかもしれない。「『次に』当てはまる」では、「多面的な考察ができる」を選択したものが最も多く、「最新動向に触れられる」が最も多かった昨年度の結果と傾向が異なる。全体に、本年度は、知識の習得よりも、自分自身で考え、それを研究のまな板にのせるということを意識させる講義が多かったのかもしれない。

表 8 問 3 「最も」「次に」あてはまるもの  
(2007年度(左)と2008年度(右)のデータ)

	2007年度		2008年度	
	「最も」	「次に」	「最も」	「次に」
a. 知識や理解を深められる	173	52	150	34
b. 必要な方法論を身につけられる	5	17	61	37
c. 自分の問題意識を磨ける	45	63	48	70
d. 最新動向に触れられる	35	81	34	57
e. 多面的な考察ができる	42	72	41	102
f. 自分のテーマの検討ができる	2	10	20	46
g. その他	3	3	4	10
<b>計</b>	<b>305</b>	<b>298</b>	<b>358</b>	<b>356</b>

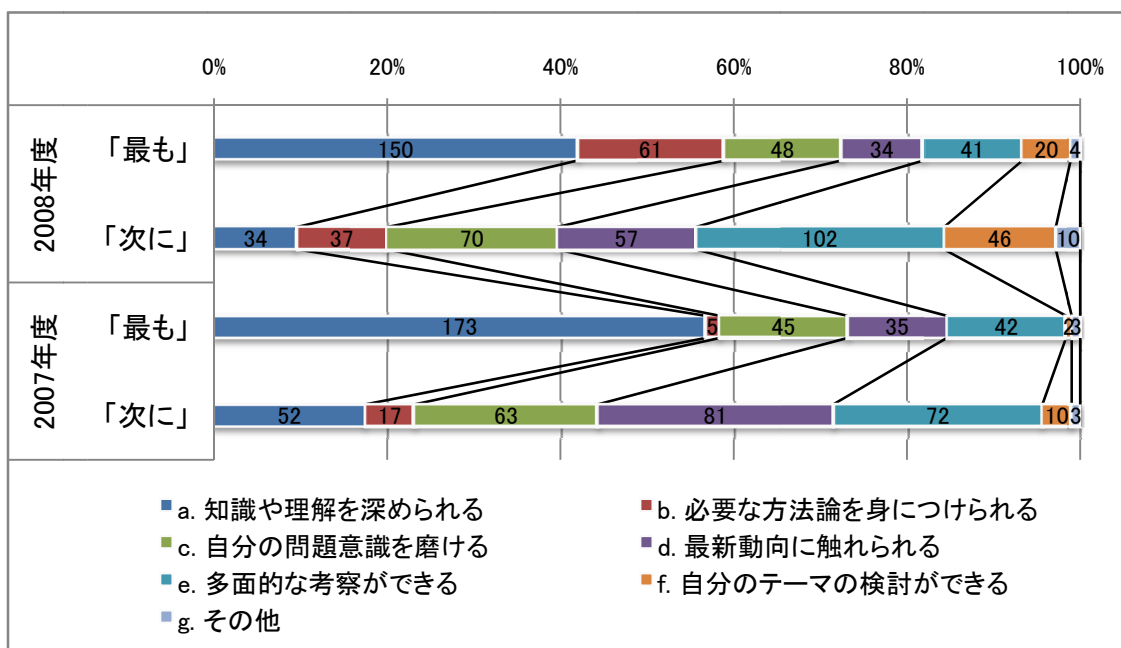


図 10 問 3 「最も」「次に」あてはまるもの

#### 問 4 の分析結果

問 4 は、「問 3 で選んだことがらの達成度」を尋ねたものである。表 9 と図 11 に本年度と昨年度の結果を示す。昨年度と同様に、選択者の数が「まあまあ達成できている」、「あまり達成できていない」、「達成できている」という順で多く、「達成できている」としたものはそれほど多くはないが、「まあまあ達成できている」を加えると 79% となり、達成感の高い学生が多くいることがわかる。

表9 問4—(1) 問3の達成度  
(2007年度(左)と2008年度(右)のデータ)

問4(1)「問3の達成度」	2007年度	2008年度
達成できている	61	45
まあまあ達成できている	260	238
あまり達成できていない	61	67
まったく達成できていない	4	6
無回答	2	2
<b>計</b>	<b>388</b>	<b>358</b>

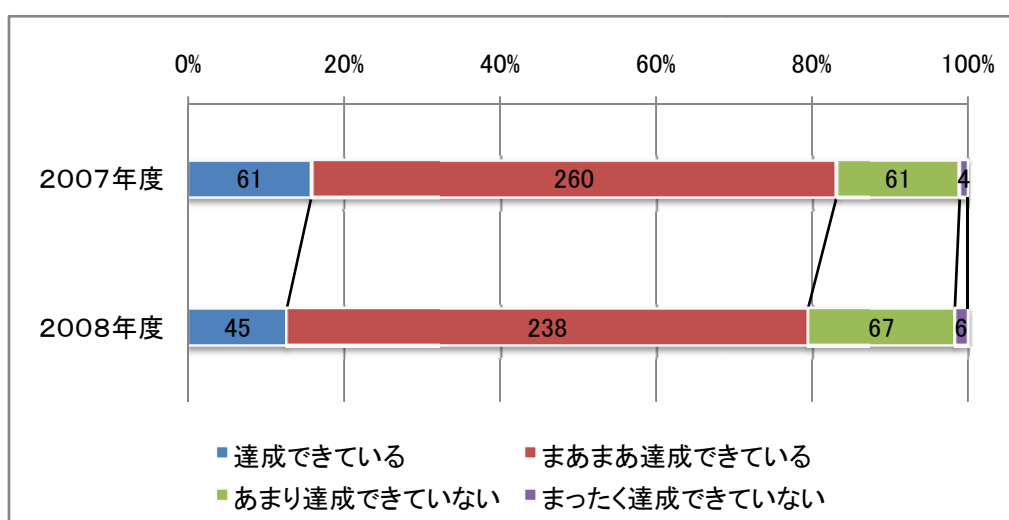


図11 問4—(1) 問3の達成度

問4については、達成できているかどうかという判断に加えて、その理由について自由記述を求めている。以下に、達成度別に自由記述の例を記す。これらの例を見ると、その理由については、授業（あるいは担当教員）に帰属させているものと、受講生自身に帰属させているものに大別できることがわかる。

○「達成できている」という回答した受講生の自由記述

- 「授業を通して自分なりの意見や疑問を持つことができた」
- 「先生自身が自分に対して問題意識を持っていたから」
- 「自分を批判的に考える大切さを知った」
- 「レジュメが配られていたので、復習がしやすかったから」
- 「必要な方法論について、資料に基づいた具体的な説明があり、同時に実習によってそれを自分のものにする機会もあるから」



○「まあまあ達成できている」という回答した受講生の自由記述

「この分野のだいたいの概要はわかった」

「詳しく教えて下さるのはとてもうれしいのだが、その分当初の予定より遅れたり省かれている部分がある」

「なかなか授業の中で考察するまでできていません。授業後もっと友人と話し合える環境が必要かもしれません」

「ものごとの考え方、知識の深さは短い時間で変わらないので、「達成できた」とは言えませんが、多面的な考察をしようという思いはますます強くなりました」

「それなりに授業に出席できたから。価値観の違う人がたくさんいるから。先生が熱心だから」

「授業自体が多面的にみることを重視して進められたから」

○「あまり達成できていない」という回答した受講生の自由記述

「まとまった内容をノートにとりたいのに、ほとんど口頭で流れていってしまうので取り辛い」

「興味がなかなかわかないから」

「自分の勉強不足によるもの」

「内容がやはり難しい。参考文献をよみつつ再度復習が必要かと」

「内容が自分の専門外のことだったので理解するだけで精一杯だったし、十分に理解できなかった」

「授業内容を自ら深める努力をしていないから」

「考え方は変わったが、達成できたかはわからない。問題に対してそれをどう受け止めどのように向き合うかは自分の問題で今後も考えていきたい」

○「まったく達成できていない」という回答した受講生の自由記述

「全然授業に出席することができなかったため」

「授業の方法には問題なかったと思います。ただ私の興味とずれていたために、難しい内容についてゆく努力をする気になれなかったからです」

「授業がつまらないので全く参加意識が起きない」

「授業の内容は普段から自分が考えていることだったし、一面的で全く深い考察に踏み込めてなかったと思うから」

#### 問4と問1の関係についての分析結果

問4で得られた達成度についての回答結果は、達成感という主観的なものにもとづいているが、授業への満足度や、授業から得たものがあるかどうか、また、当該の授業が役に立ったかどうかといった問1で尋ねられた主観的評価と深い関係にあるかもしれない。そこで、問1の「満足している」、「得たものがある」、「役に立った」という質問項目別に、当てはまった場合から当てはまらない場合へと、達成度の判断がどのように変化するかを検討した。

表10、図12に示されるように、問1の「満足している」に当てはまる場合には、そうでない場合に比べて、「達成できている」または「まあまあ達成できている」という回答が圧倒的に多い。「達成できた」から満足度が高いのか、満足のいくものだったので「達成できた」と判断されたのかという因果関係については不明だが、問1で回答された満足度と達成度には密接な関係があることがわかった。

表10 問1「満足しているかどうか」×問4「達成度」

満足しているかどうか	達成できている	まあまあ達成できている	あまり達成できていない	まったく達成できていない
1(あてはまる)	36	101	2	0
2(どちらかといえばあてはまる)	8	106	31	0
3(どちらともいえない)	0	26	21	1
4(どちらかといえばあてはまらない)	0	4	10	1
5(あてはまらない)	1	1	3	4

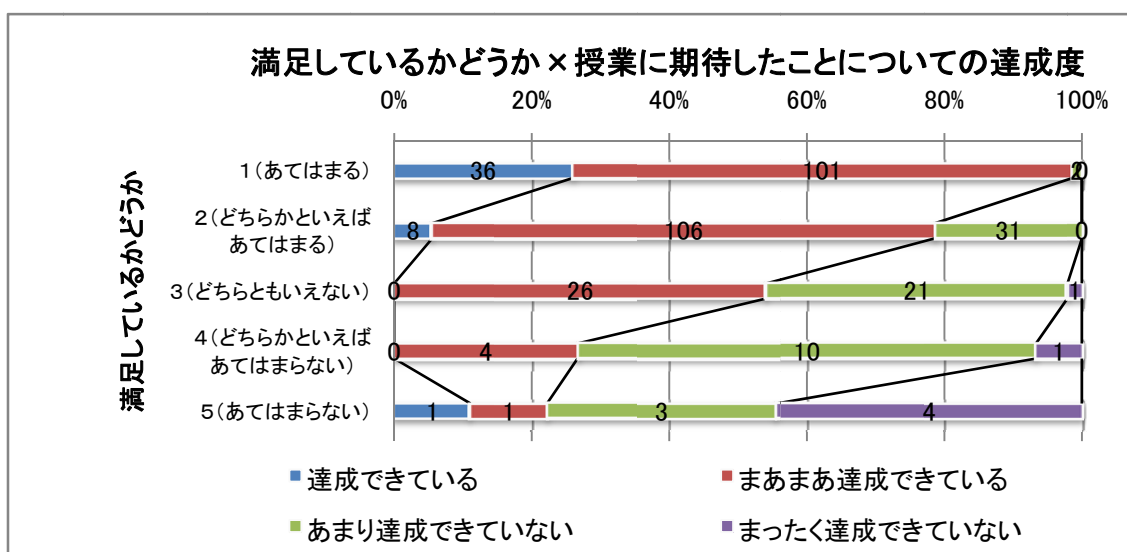


図12 問1「満足しているかどうか」×問4「達成度」

問1の「得たものがある」についても同様の結果が得られている。表11、図13に示されるように、「得たものがある」に当てはまる場合には、そうでない場合にくらべて、「達成できている」または「まあまあ達成できている」という回答が多い。

表11 問1「得たものがあるかどうか」×問4「達成度」

得たものがあるかどうか	達成できている	まあまあ	あまり	まったく
		達成できている	達成できていない	達成できていない
1(あてはまる)	38	114	13	1
2(どちらかといえばあてはまる)	6	102	29	1
3(どちらともいえない)	0	17	16	0
4(どちらかといえばあてはまらない)	0	5	7	1
5(あてはまらない)	1	0	2	3

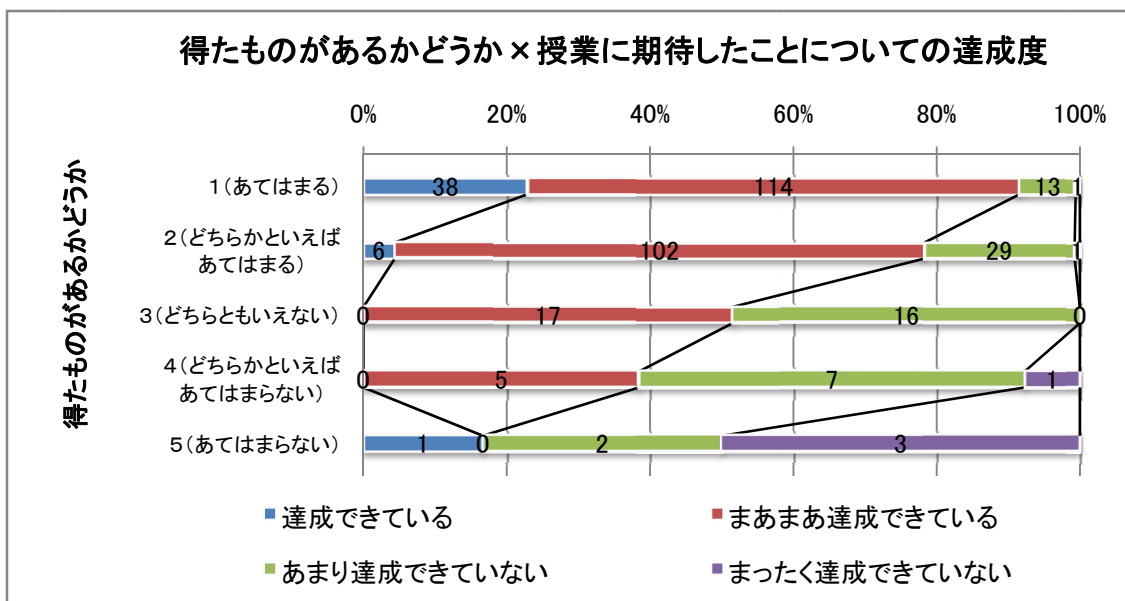


図13 問1「得たものがあるかどうか」×問4「達成度」

同様の傾向は、問1の「役に立った」項目でも見られる。表12、図14に示されるように、「役に立った」に当てはまる場合には、そうでない場合にくらべて、「達成できている」または「まあまあ達成できている」という回答がかなり多い。いずれも因果関係については不明だが、問1の内容と達成度には密接な関係があることがわかった。

表 12 問 1 「役に立ったかどうか」 × 問 4 「達成度」

役に立ったかどうか	達成できている	まあまあ	あまり	まったく
		達成できている	達成できていない	達成できていない
1(あてはまる)	33	76	2	0
2(どちらかといえばあてはまる)	3	77	18	1
3(どちらともいえない)	6	75	34	1
4(どちらかといえばあてはまらない)	2	8	11	0
5(あてはまらない)	1	1	1	4

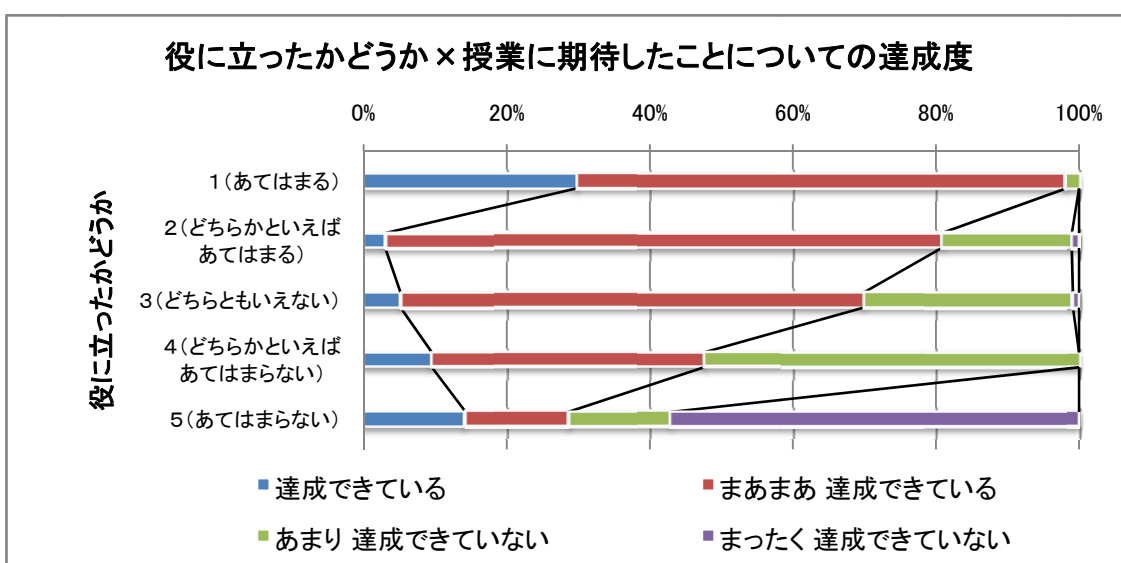


図 14 問 1 「役に立ったかどうか」 × 問 4 「達成度」

### § 3.4 授業に臨む自己への評価

ここでは、授業全体に対する評価と、授業に対して受講生自身がどのように取り組んできたのか等について尋ねた回答用紙 B から得られた結果を報告する。回答用紙 B の配布総数は 378 部であり、内 317 部が回収され、回収率は 84%であった。なお、記入漏れや回答方法の誤りが認められた 5 件を除いた残りの 312 件を分析対象とした。なお、参考となる場合には、昨年度の結果（講義科目の調査結果）をあわせて報告している。

#### 問 5 の分析結果

問 5 は、授業に対して「心がけていること」を 3 まで答えさせたものである。表 13、図 15 が示す通り、最も多い回答は、「欠かさず出席」であり、全体の 66%がこの選択肢を選んでいる。この点は、昨年度の講義に関する回答結果と同様である。2 番目に多い回答が「問題意識と照らし合わせて授業理解」となった点は、昨年度と異なるが、その他の回答については、昨年度と同様であり、比較的安定した傾向が見られる。

表 13 問 5 心がけていること（三つまで選択）  
（2007 年度（左）と 2008 年度（右）のデータ）

問5「ころがけていること(三つまで)」	2007 年度	問5「ころがけていること(三つまで)」	2008 年度
a. 欠かさず出席	165	a. 欠かさず出席	206
g. 集中して授業を聴く	162	d. 問題意識と照らし合わせて授業理解	186
d. 問題意識と照らし合わせて授業理解	111	g. 集中して授業を聞く	149
b. 能動的に授業に臨む	70	b. 能動的に授業に臨む	88
c. 授業以外でも自主的に勉強	30	c. 授業以外に自主的に勉強	30
f. 時間内に疑問点を解決	8	f. 時間内に自分の疑問点を解決	18
e. 積極的に発言	2	e. 積極的に発言・質問	12
h. その他	5	h. その他	6

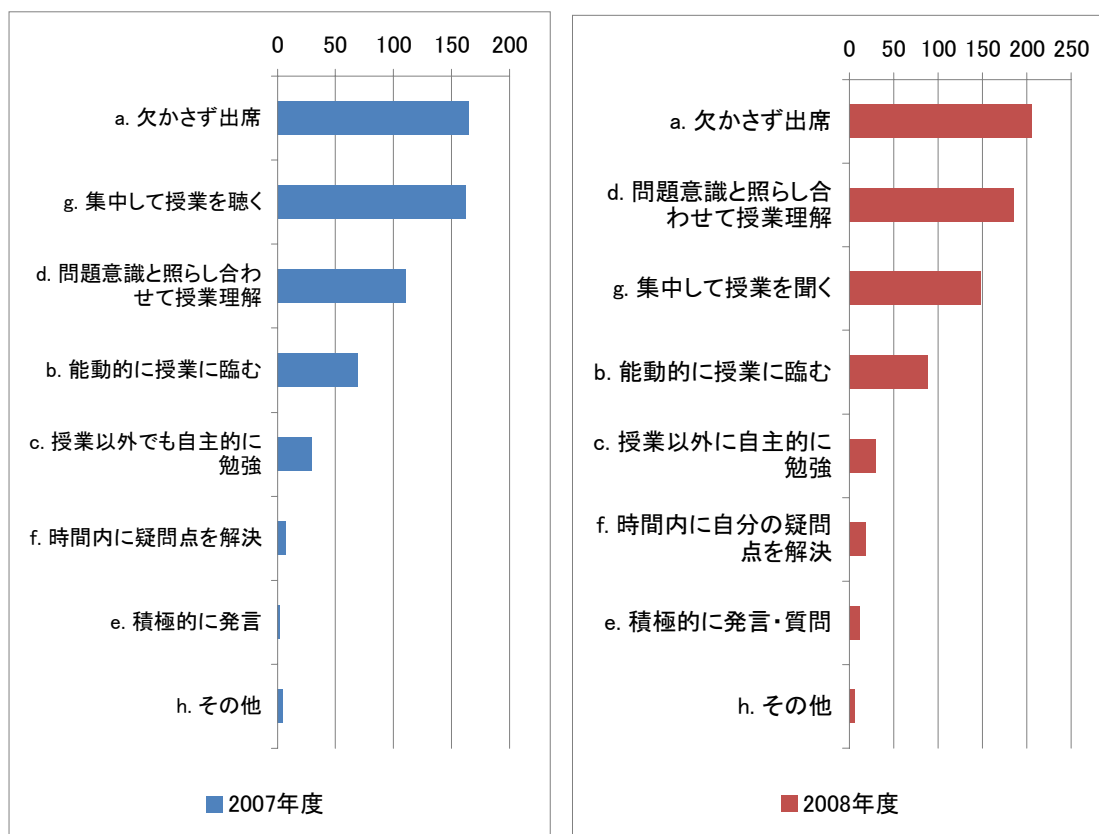


図 15 問5 心がけていること（三つまで選択）  
（2007年度（左）と2008年度（右）のデータ）

表 14 に、2つの項目が同時に選択される頻度（共起頻度）を示し、表 15 には、各項目の合計選択数でこの共起頻度を除して、それぞれの共起頻度の割合を求めたものを示した。これらの表から、「欠かさず出席」を選択した者のうち、「問題意識と照らし合わせて授業理解」を選択したのは 55% の 114 名、「集中して授業を聴く」を選択したのは 46% の 94 名であり（それぞれ全体の 37%、30%）、上位の項目の選択にはかなりの重複があることがわかった。ただし、全体が 312 名なので、「欠かさず出席」と「問題意識と照らし合わせて授業理解」の2つの項目は、もともと半数以上の受講生に選択されており、その他の項目については、その選択者の多くが、これら2つの項目を選択していることになるのは当然とこといえよう。

表 14 2つの項目が同時に選択された頻度

問5「こころがけていること(三つまで)」	a	b	c	d	e	f	g	h	計
a. 欠かさず出席		52	17	114	5	10	94	3	206
b. 能動的に授業に臨む	52		5	41	2	5	44	1	88
c. 授業以外でも自主的に勉強	17	5		15	2	3	9	0	30
d. 問題意識と照らし合わせて授業理解	114	41	15		6	11	83	3	186
e. 積極的に発言	5	2	2	6		0	5	0	12
f. 時間内に疑問点を解決	10	5	3	11	0		6	0	18
g. 集中して授業を聴く	94	44	9	83	5	6		0	149
h. その他	3	1	0	3	0	0	0		6

表 15 合計選択数に占める各項目の共起頻度の割合

問5「こころがけていること(三つまで)」	a	b	c	d	e	f	g	h
a. 欠かさず出席		0.25	0.08	0.55	0.02	0.05	0.46	0.01
b. 能動的に授業に臨む	0.59		0.06	0.47	0.02	0.06	0.5	0.01
c. 授業以外でも自主的に勉強	0.57	0.17		0.5	0.07	0.1	0.3	0
d. 問題意識と照らし合わせて授業理解	0.61	0.22	0.08		0.03	0.06	0.45	0.02
e. 積極的に発言	0.42	0.17	0.17	0.5		0	0.42	0
f. 時間内に疑問点を解決	0.56	0.28	0.17	0.61	0		0.33	0
g. 集中して授業を聴く	0.63	0.3	0.06	0.56	0.03	0.04		0
h. その他	0.5	0.17	0	0.5	0	0	0	

心がけていることについては、学年等によって大きく異なる可能性があるため、学年別に各回答の割合を表 16 と図 16 に示す。全体的な傾向は学年等によって大きな違いは見られないようであるが、「欠かさず出席」については、学部生では学年があがるにつれてその選択率が減少していることがわかる。

表 16 こころがけていること（回生別）

回生	a.	b.	c.	d.	e.	f.	g.	h.
1回生(文系入試)	14	1	1	11	1	2	9	2
1回生(理系入試)	1	1	0	1	0	0	0	0
2回生(文系入試)	89	38	13	63	1	6	47	2
2回生(理系入試)	6	2	1	6	3	1	6	0
3回生	50	28	8	54	11	2	47	2
4回生	21	11	3	23	2	3	20	1
5回生以上	1	1	0	6	0	1	1	0
修士	12	3	1	10	0	2	12	1
博士	3	2	0	3	0	1	3	0
聴講生・科目等履修生	6	1	2	6	0	0	4	0
その他	3	0	1	3	0	0	2	0

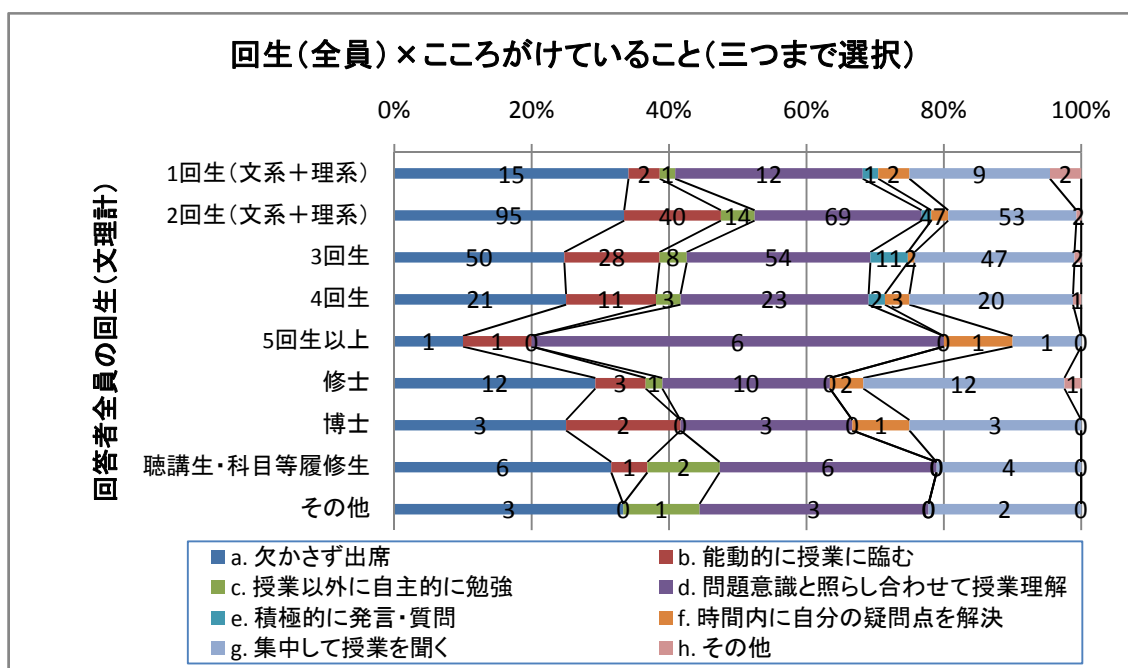


図 16 こころがけていること（回生別）



## 自由記述の例示

問 6 では「問 5 でとりあげたことに取り組もうとするとときに、授業の運営の仕方や時間の使い方などが今とはちがっていけばよいと考えることがありますか？ 工夫改善したほうがよいと思える点について書いてください」とし、自由記述を求めた。参考として、以下には、問 5 選択肢の中で多く選ばれていた「a. 欠かさず出席」、「g. 集中して授業を聞く」、「d. 問題意識と照らし合わせて授業理解」の 3 つすべてを選択した回答者（46 名）の自由記述から授業科目を特定できないものだけに限り紹介する。

「授業前にそのテーマに関連した文献を読んで、事前に学習すること」

「非常に集中しやすい授業だったので、特に改善点は思いつきません」

「自習用の参考文献の案内」

「心がけてはいるが、たまに寝てしまう時があるので、より集中できるようにしたい」

「1 回 1 回の授業内容のつながりを強調してほしい（少し前回の復習をするなど）」

「もう少しゆっくり話してほしいです」

「a について；出席点を設けること。d について；自分次第。g について；授業開始時に予め全体の概要を提示すれば、学生も話についていきやすくなると思う」

問 7 では、「あなたがこの授業を通して得られていると思うことは何ですか」と尋ね、次の 3 つの項目について自由記述を求めた。

(1) 事前期待通りに得られていること

(2) 事前に期待したのに得られていないこと

(3) 授業前に期待していなかったが結果として得られていること

以下には、これらの項目別に自由記述の例を記す。

### ○事前期待通りに得られていること

「基礎知識を得ること。自分のテーマとの関連」

「当該領域についての基本的な知識を得て、今までの意識を改めること」

「正直なところ、この講義のガイダンスを聞いてもこの講義の概要というものがいまいちつかめなかったので、事前に何かを期待するということができませんでした」

「一つの問題について考える時の考える枠組み。問題の捉え方」

「自分の問題意識を磨くこと」

### ○事前に期待したのに得られていないこと

「自分の学びたい学問をピンポイントに知ること」

「興味のない分野における専門用語」

「全般的な知識は得られていないと思います」

「設定された範囲が終わっていない」

「授業で扱われているテーマに対して理解したくて授業を受けているのに、受ければ受けるほどよくわからなくなることがありました」

#### ○授業前に期待していなかったが結果として得られていること

「自分について、『考える』そのものについて見直す姿勢」

「それぞれのテーマが思った以上に深いということに気づけたこと。また、そうしたものに向き合う態度」

「物事を批判的に見ることの重要性を知った」

「大ざっぱな仕組みだけでなく、それに至るまでの過程を知ることができた」

「先生の授業スタイルは大変参考になった。今までみてきた大学の教員の中で、最も”教員”らしかったです」

問8では、授業担当教員に特に伝えたいことを自由に記述してもらったが、この質問項目は、担当教員へフィードバックを目的として設定されたものなので、今回の分析の対象とはしなかった。

#### 問9についての分析結果

本年度は、授業アンケートを開始してから3年目(4回目)にあたる。したがって、これまでに同様のアンケートに回答した受講生がいると思われる。本アンケートは、教育学研究科の自己点検・評価の実施方針にしたがって、回答者である受講生もまた、授業に対する自己の取り組みを振り返りながらこのアンケートに回答することが期待されている。そこで、問9では、これまでに授業アンケートに回答してきたことが、本年度の受講態度等にどのような影響を持ったのかについて尋ねた。

表17 問9—(1) 同様の授業アンケートに以前に答えた回数

回答回数	件数
0回	161
1回	75
2回	35
3回以上	33
未記入	8
<b>計</b>	<b>312</b>

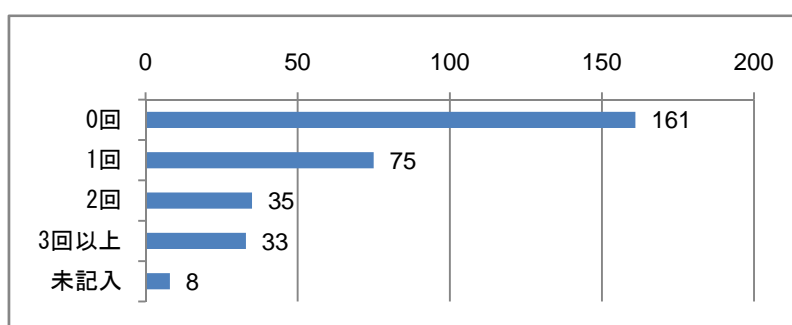


図 17 問 9—（1）同様の授業アンケートに以前に答えた回数

表 17 と図 17 に示されているように、半数以上の回答者が本年度初めて教育学研究科の授業アンケートに回答しているが、なお 100 名以上の受講生が以前に同様のアンケート調査を経験していることがわかる。

問 9 の（2）では、これまでに 1 回以上、同様の授業アンケートに回答したことがある場合に、「そのアンケートを受けて自分自身に変化したところがあるか」どうかについて自由記述を求めた。この問いに対する反応は、大別すると、「変化なし」、「ポジティブな変化があった」、「無回答」という 3 つのカテゴリーのいずれかに分類されるものであった。「変化なし」カテゴリーの反応の多くは、「なし」、「特になし」、「変化はなし」といった記述のみであった。以下に、「ポジティブな変化があった」という内容の記述については、「授業内容を見直すようになった」、「授業構成の在り方を考えるようになった」といった、授業内容についての意識の高まりについて言及する記述に加え、以下のような、授業と自分自身の関係の変化について言及したものが見られた。

- 「授業の、自分の中での位置づけを確認できた」
- 「自分の授業を受ける姿勢の問題にも気づかされる」
- 「自分が講義に対し何を求め、どのように参加するのか見直すようになった」
- 「自分が能動的に参加しているかどうかの反省」
- 「授業で得られたことを振り返る機会になる」

ただし、3 つの反応カテゴリーの人数を見ると、これまでに 1 回の回答経験がある 75 名では、「変化なし」が 36 名、「ポジティブな変化があった」は 8 名、「無回答」が 31 名、2 回の回答経験があるグループでは、35 名の反応の内、これらのカテゴリーにそれぞれ、19 名、1 名、16 名の反応が対応しており、ポジティブな反応は多くはない。3 回以上の 33 名では、「変化なし」が 7 名、「ポジティブな変化があった」は 8 名、「無回答」が 18 名で、ポジティブな変化について記述した回答者の割合は若干多く見えるが、これに関しては、過去に 3 回以上回答している比較的積極的な受講生による反応である可能性を考慮しておく必要があると思われる。

## ■ 4. 「学生による授業アンケート」の結果を受けて

### § 4.1 「学生による授業アンケート」の課題と改善の方向

「学生による授業アンケート」は今回で 4 回目となり、対象授業の担当教員、受講生の両方とも調査の主旨を理解し全面的に協力していただいたおかげで、スムーズに実施することができた。前回の調査で指摘された回収率の改善についても、回答用紙 A（マークシートによる回答）が 95%、回答用紙 B（自由記述による回答）が 84%と、高い回収率を確保することができた。

内容については、前回調査で課題として挙げられていた文系・理系入試学生の比較ではほとんど差がみられないこと、また授業についての否定的な評価のうちの最上位にある「むずかしかった」や「負担が大きかった」という項目が、他の項目と関連づけてみていくと必ずしも否定的なものではなく、「噛み応えのある」授業を求めているものと理解されることなど、本学部・研究科の学生の授業態度や期待の傾向や特徴が引き出された点でも示唆的な結果だったということができらるだろう。

また、今回は 4 回目の調査になることから、授業アンケートそのものへの理解という点も質問項目に取り入れてみた。2 回以上授業アンケートを受けた学生にしていえば、授業アンケートがマイナスになったという評価はなく、逆に数は少ないものの授業内容や受講態度についての意識を高める機会になったという肯定的な評価がみられたことも収穫のひとつである。

ただし、いくつかの課題や問題点も残っている。まず、授業アンケートの実施期間内に同一の学生が複数の実施科目に出席し、回答している例をチェックできないという手続き上の問題点である。科目が異なれば評価も異なるとはいえ、同一の学生による重複回答をどう扱うかは今後の課題である。

また、回収率を考えて回答用紙を A 票と B 票に分け、2 回に分けて回収したが、やはり回答する学生にとっても分析者にとってもかなり負担が大きい。今回までの質問項目と分析結果を検討して、相関の高い項目についてははずすなど、質問項目の精選・洗練化によって A 票・B 票をひとつにまとめたほうがよいかもしれない。その点についてはさらに検討が必要であろう。

もうひとつ、本アンケートの結果と本学部・研究科の教育全体との関連についても検討することが重要であると思われる。本アンケートの結果をみると、個々の授業については満足度も高く、概ね良好な結果が得られている。しかし一方では、本学部・研究科の教育全体をみると、専門教育と教養教育の関係や内部からの大学院への進学（希望）者の問題など、検討すべき課題もある。この授業アンケートを本学部・研究科の教育をめぐる諸状況を分析する柱として位置づけるためには、個々の授業についての評価・点検作業だけでなく、さらにその結果をカリキュラムや大学院入試制度の問題など、学部教育全体の中で検討していくことが重要である。

#### § 4.2 評価結果のまとめと公表

本報告書は、本学部・研究科の授業全般の特徴や傾向をとらえることを念頭において作成している。個別の授業についての評価結果については、希望する授業担当者にフィードバックする予定である。また、学生・院生からの授業担当者への希望に関する項目についての記述は、すべての授業担当者にそれぞれフィードバックする。報告書は、他大学の教育学部あるいはそれに関係の深い学部、および京都大学の他部局・学部・研究科の自己評価・自己点検に関わる教員に配布する。また学生の希望者にも報告書を配布する。本報告書の概要は、本研究科のホームページにも掲載して公表する。

#### § 4.3 報告書の利用法と評価

報告書の作成のあとに、この報告書をもとにしてFDのための会を開き、授業の改善に向けて本研究科メンバーの意識を高める。また各授業担当者は、自らの授業への学生の評価をもとに授業を改善する。さらに授業によっては、本報告書を研究の題材として取り上げ、学生・院生ともに今回のアンケートの問題点や改善点について議論することも予定されている。

# 資 料

# 2008 年度学生による授業アンケート集計

## —文系・理系比較版—

教育学部の1回生および2回生は、文系・理系入試を経て入学している。入学定員は、文系入試50人に対し理系入試10人となっているため、いまだ理系入試を経た学生の人数は少ないが、試みに文系・理系入試を経た学生の比較を行ってみた。その結果を報告する。

### 概要

- ・集計対象は、回答用紙Aが139件（うち文系122件、理系17件）、回答用紙Bが96件（うち文系86件、理系10件）である。
- ・回答用紙Aの設問
  - ・問0 「回生」「性別」
  - ・問1—（1） 「満足している」「得たものがある」「役に立った」
  - ・問2 「この授業について当てはまるもの」（回答数無制限）
  - ・問3 「最も」「次に」あてはまるもの
  - ・問4 「達成度」
- ・回答用紙Bの設問
  - ・問0 「回生」「性別」
  - ・問5 「心がけていること」

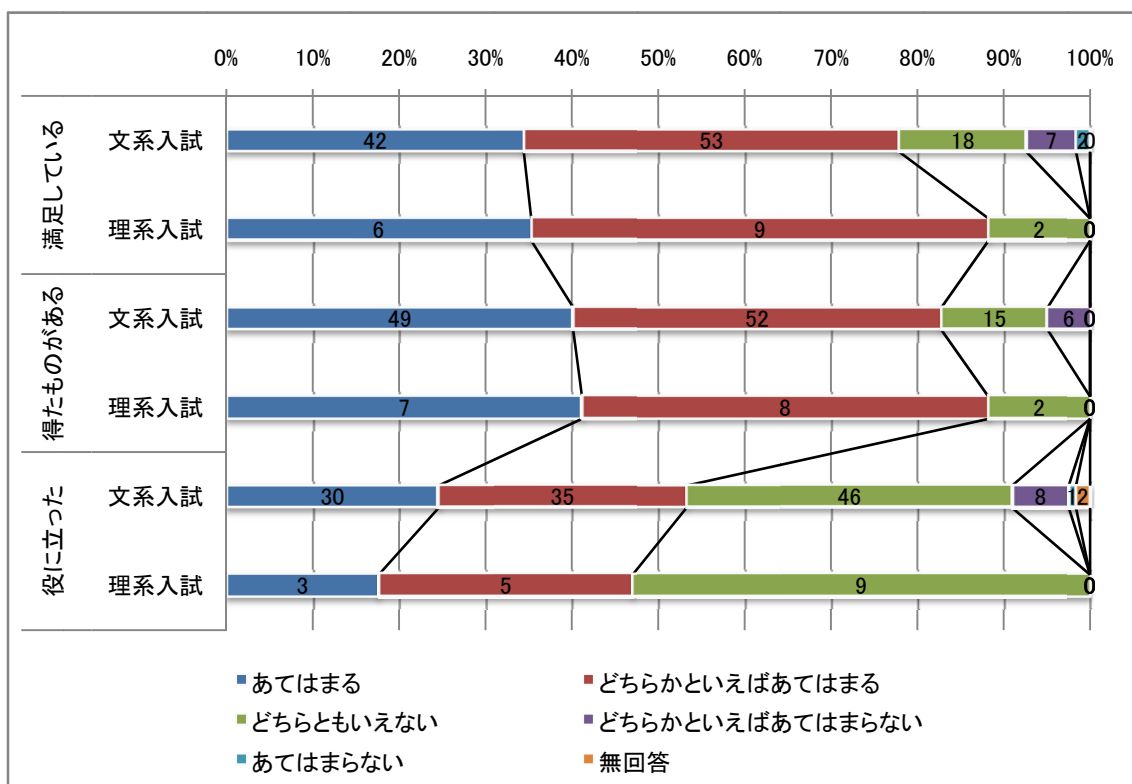
### 問0 回生と性別

回生／文・理	回答用紙A		回答用紙B	
	文系入試	理系入試	文系入試	理系入試
1回生	49	9	20	2
2回生	73	8	66	8
<b>計</b>	<b>122</b>	<b>17</b>	<b>86</b>	<b>10</b>

性別／文・理	回答用紙A		回答用紙B	
	文系入試	理系入試	文系入試	理系入試
男	54	8	32	4
女	58	8	46	4
未記入	10	1	8	2
<b>計</b>	<b>122</b>	<b>17</b>	<b>86</b>	<b>10</b>

問1—(1) 「満足している」「得たものがある」「役に立った」

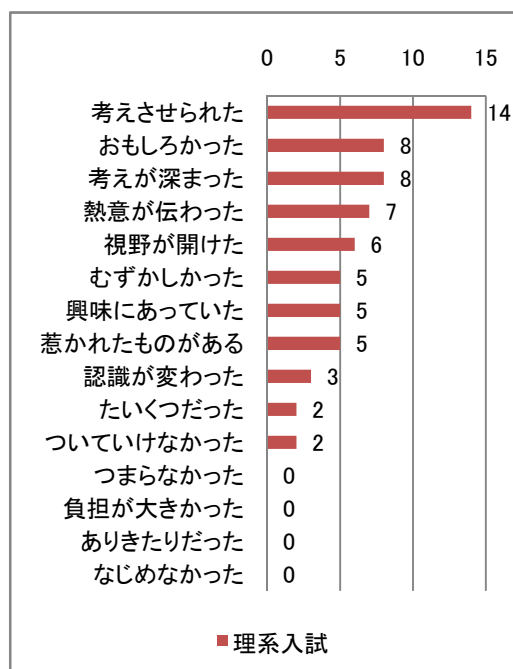
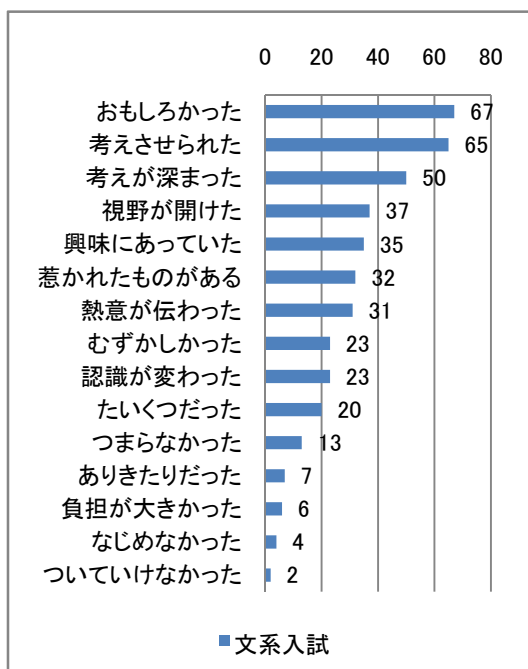
	満足している		得たものがある		役に立った	
	文系入試	理系入試	文系入試	理系入試	文系入試	理系入試
あてはまる	42	6	49	7	30	3
どちらかといえばあてはまる	53	9	52	8	35	5
どちらともいえない	18	2	15	2	46	9
どちらかといえばあてはまらない	7	0	6	0	8	0
あてはまらない	2	0	0	0	1	0
無回答	0	0	0	0	2	0
<b>計</b>	<b>122</b>	<b>17</b>	<b>122</b>	<b>17</b>	<b>122</b>	<b>17</b>





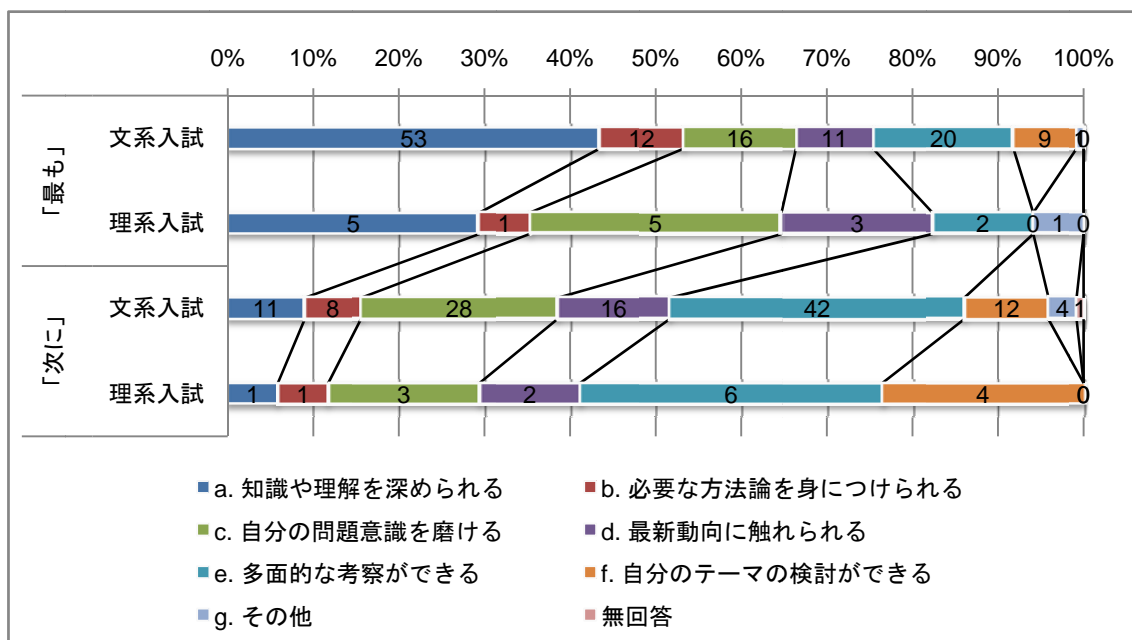
問2 「この授業について当てはまるもの」(回答数無制限)

	文系入試	理系入試
おもしろかった	67	8
つまらなかった	13	0
考えさせられた	65	14
むずかしかった	23	5
考えが深まった	50	8
負担が大きかった	6	0
認識が変わった	23	3
たいくつだった	20	2
興味にあっていた	35	5
ありきたりだった	7	0
視野が開けた	37	6
なじめなかった	4	0
熱意が伝わった	31	7
ついていけなかった	2	2
惹かれたものがある	32	5



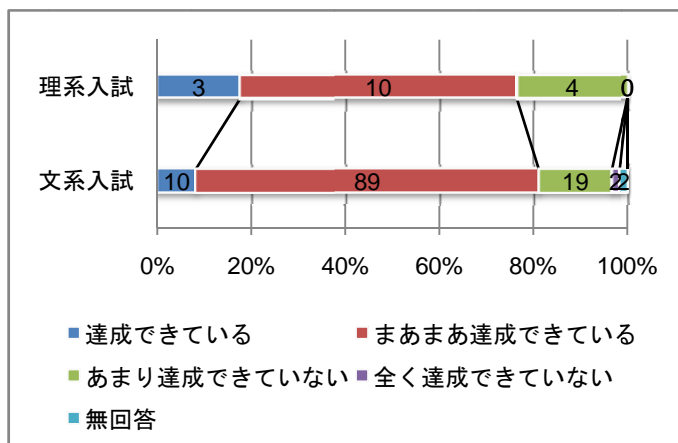
### 問3 「最も」「次に」あてはまるもの

	「最も」		「次に」	
	文系入試	理系入試	文系入試	理系入試
a. 知識や理解を深められる	53	5	11	1
b. 必要な方法論を身につけられる	12	1	8	1
c. 自分の問題意識を磨ける	16	5	28	3
d. 最新動向に触れられる	11	3	16	2
e. 多面的な考察ができる	20	2	42	6
f. 自分のテーマの検討ができる	9	0	12	4
g. その他	1	1	4	0
無回答	0	0	1	0



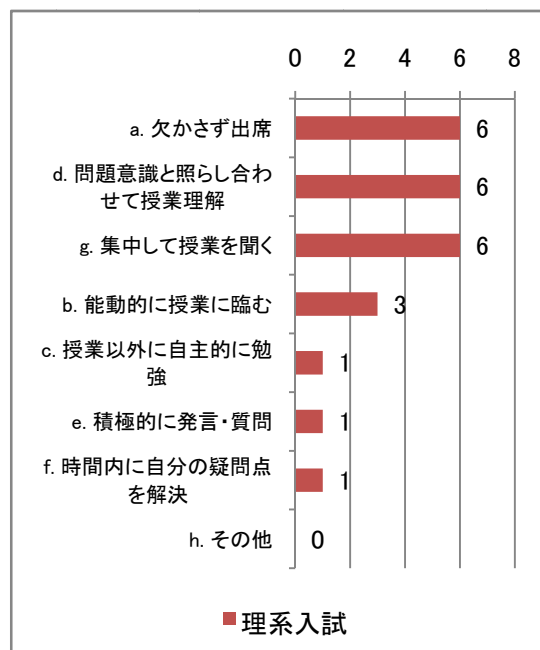
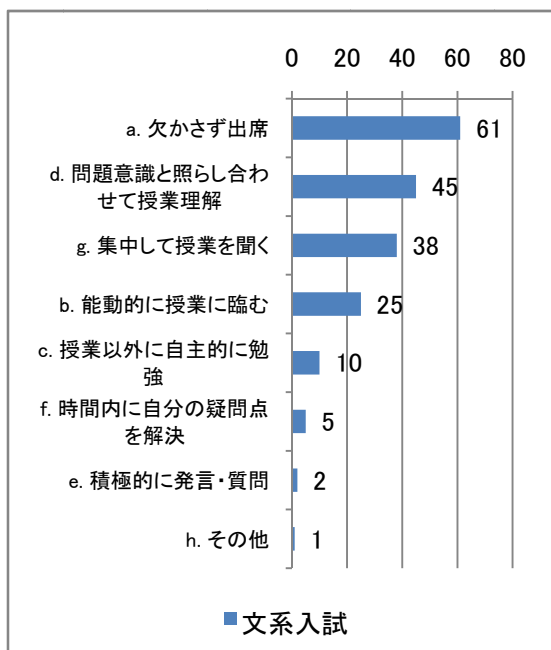
#### 問4 「達成度」

	文系	理系
達成できている	10	3
まあまあ達成できている	89	10
あまり達成できていない	19	4
全く達成できていない	2	0
無回答	2	0
<b>計</b>	<b>122</b>	<b>17</b>



#### 問5 「心がけていること」

	文系入試	理系入試
a. 欠かさず出席	61	6
b. 能動的に授業に臨む	25	3
c. 授業以外に自主的に勉強	10	1
d. 問題意識と照らし合わせて授業理解	45	6
e. 積極的に発言・質問	2	1
f. 時間内に自分の疑問点を解決	5	1
g. 集中して授業を聞く	38	6
h. その他	1	0



# 2008 年度学生による授業アンケート集計

## —学部・大学院比較版—

教育学部・大学院の授業を受講した学生の回生（学部・大学院）で集計を行なった。その結果を報告する。

### 概要

・集計対象は回答用紙 A が 342 件（うち学部生 319 件，大学院生 23 件）。回答用紙 B が 302 件（うち学部生 279 件，大学院生 23 件）である。なお，回答に不備があるものについては除外した。

#### ・回答用紙 A の設問

- ・問 0 「回生」「性別」
- ・問 1—（1） 「満足している」「得たものがある」「役に立った」
- ・問 2 「この授業について当てはまるもの」（回答数無制限）
- ・問 3 「最も」「次に」あてはまるもの
- ・問 4 「達成度」

#### ・回答用紙 B の設問

- ・問 0 「回生」「性別」
- ・問 5 「心がけていること」

---

### 問 0 回生と性別

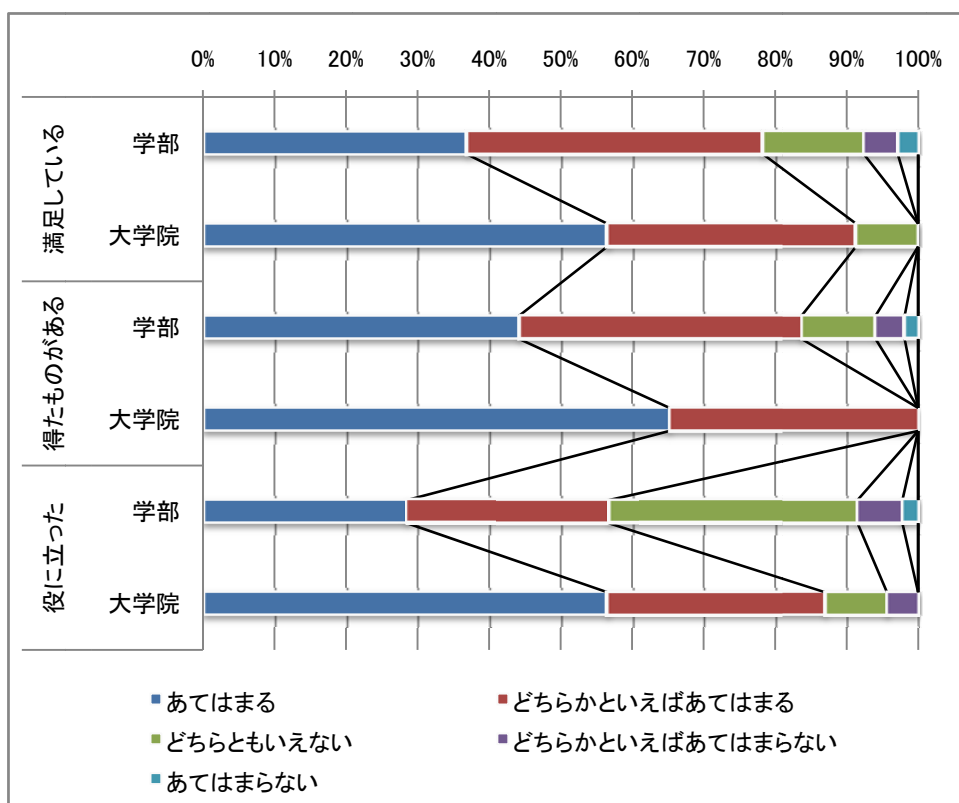
学部生・大学院生	回答用紙A	回答用紙B
学部生	319	279
大学院生	23	23
その他	10	10

---

性別／学部・大学院	回答用紙A		回答用紙B	
	学部生	大学院生	学部生	大学院生
男	146	16	115	16
女	154	6	130	6
未記入	19	1	34	1
<b>計</b>	<b>319</b>	<b>23</b>	<b>279</b>	<b>23</b>

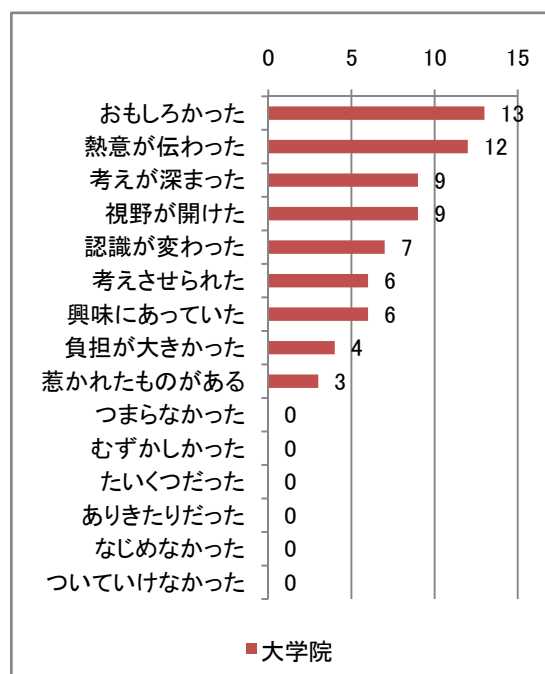
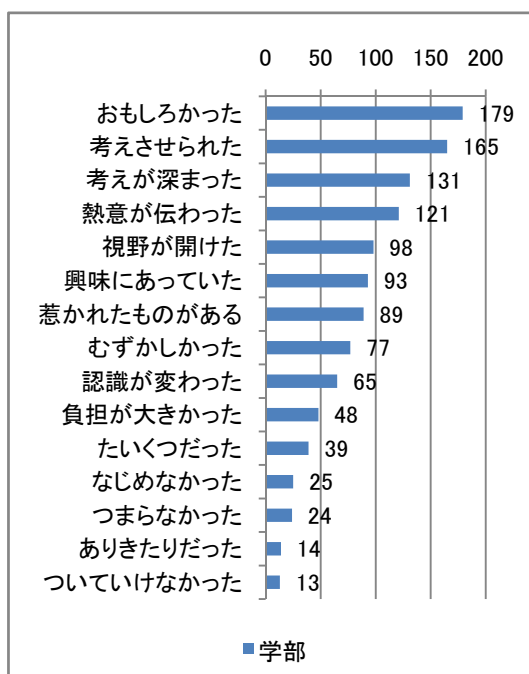
問1－(1) 「満足している」・「得たものがある」・「役に立った」

	満足している		得たものがある		役に立った	
	学部	大学院	学部	大学院	学部	大学院
あてはまる	118	13	141	15	91	13
どちらかといえばあてはまる	132	8	126	8	90	7
どちらともいえない	45	2	33	0	111	2
どちらかといえばあてはまらない	15	0	13	0	20	1
あてはまらない	9	0	6	0	7	0
<b>計</b>	<b>319</b>	<b>23</b>	<b>319</b>	<b>23</b>	<b>319</b>	<b>23</b>



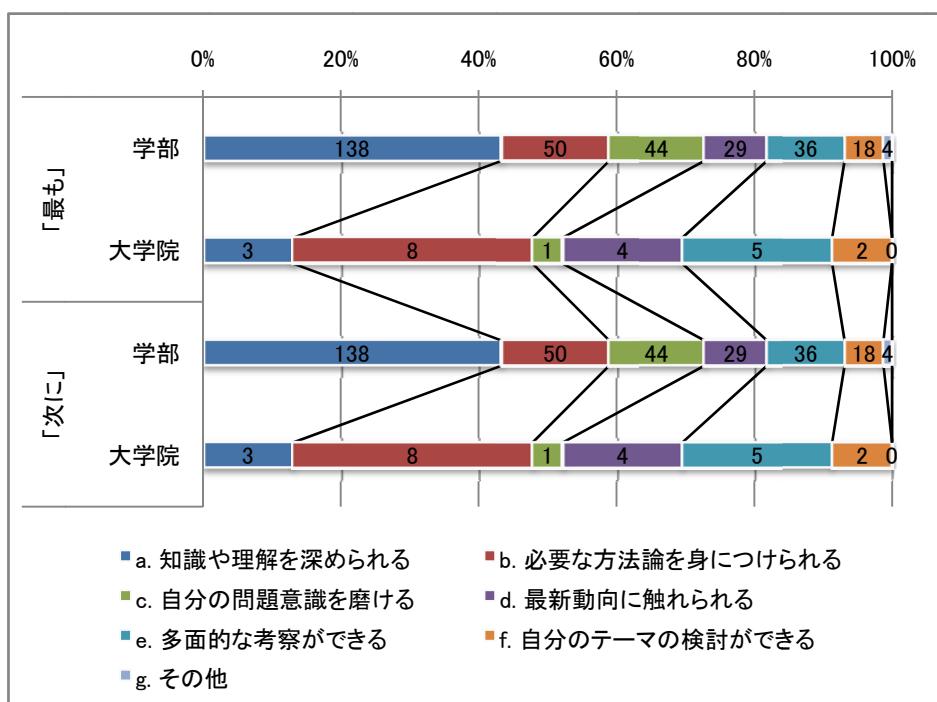
問2 「この授業について当てはまるもの」(回答数無制限)

	学部	大学院
おもしろかった	179	13
つまらなかった	24	0
考えさせられた	165	6
むずかしかった	77	0
考えが深まった	131	9
負担が大きかった	48	4
認識が変わった	65	7
たいくつだった	39	0
興味にあっていた	93	6
ありきたりだった	14	0
視野が開けた	98	9
なじめなかった	25	0
熱意が伝わった	121	12
ついていけなかった	13	0
惹かれたものがある	89	3



### 問3 「最も」「次に」あてはまるもの

	「最も」		「次に」	
	学部	大学院	学部	大学院
a. 知識や理解を深められる	138	3	138	3
b. 必要な方法論を身につけられる	50	8	50	8
c. 自分の問題意識を磨ける	44	1	44	1
d. 最新動向に触れられる	29	4	29	4
e. 多面的な考察ができる	36	5	36	5
f. 自分のテーマの検討ができる	18	2	18	2
g. その他	4	0	4	0
<b>計</b>	<b>319</b>	<b>23</b>	<b>319</b>	<b>23</b>



## 学生による授業アンケート（2008年度） - 質問用紙 -

京都大学 大学院教育学研究科・教育学部

この授業アンケートは、授業をより充実したものにすることを目的として実施するものです。授業を担当する先生やあなたを評価する目的で実施するものではありません。自分自身の授業への関わり方・授業のあり方などを振り返って記入してください。無記名で回答するようになっていきますので、皆さんの率直な意見を聞かせてください。このアンケート結果が成績などに反映されることはありません。

みなさんが書いてくださった結果については、フィードバックの機会を設ける予定です（昨年の授業アンケートの結果は教育学研究科のホームページで見ることができます）。また、得られた結果を上記の目的以外に使用することはありません。ただ、報告書などに個人が特定されない形で掲載される場合があります。調査の対象となるのは、この授業です。

選択肢のある質問については、当てはまるものを選び、回答用紙（別紙のマークシート）の該当箇所の○を塗りつぶしてください。また、あなたの意見を記述する質問については、回答用紙の該当箇所の空欄に直接記述してください。

### 回答用紙（マークシート）の記入方法：

1. マークは必ずHBの黒鉛筆で正確にできるだけ濃く塗りつぶしてください。
2. 訂正する場合は、消しゴムできれいに消してください。
3. マークシートを汚したり、折り曲げたりしないでください。

### ■回答用紙Aにお答えください。

**問0.** あなたの所属・回生・性別について回答用紙Aの該当箇所の○を塗りつぶしてください。教育学部1回生・2回生の方は、入学試験を文系で受けたか理系で受けたかについて、該当箇所の○を塗りつぶしてください。

**問1.** この授業についてどのように思いましたか？ 次の問いに答えてください。

- (1) 「満足している」「得たものがある」「\*役に立った」のそれぞれの項目に対してどの程度当てはまるか、回答用紙Aの該当箇所の○を塗りつぶしてください。
- (2) 問1(1)の「\*役に立った」で、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」を選択した人は、どのように役に立ったか具体的に記述してください。（回答用紙Aに自由記述）

**問2.** この授業をうけてみてどう思いましたか？回答用紙Aの選択肢から当てはまるものを全て選び、その○を塗りつぶしてください。（いくつでもかまいません）

**問3.** あなたがこの授業に期待するのはどんなことですか？ 「最も」当てはまるものと、「次に」当てはまるものを以下から選び回答用紙Aの該当箇所の○を塗りつぶしてください。

- a. 当該領域の全般的な知識や理解を深められること
- b. 当該領域で必要とされる方法論を身につけられること
- c. 当該領域に関わる自分の問題意識を磨けること
- d. 当該領域の主要な論点や最新動向に触れられること
- e. 当該領域の様々な議論や課題について、多面的な考察ができること



- f. 自分の問題意識やテーマが当該領域の中でどんな位置づけや意味をもっているかを検討できること
- g. その他 ( )

**問4. 問3で選んだことがらについて次の問いに答えてください。**

- (1) 問3で選んだことがらは、この授業ではどの程度達成できていますか？ 回答用紙Aの該当箇所の○を塗りつぶしてください。
- (2) 上記のように思う理由について詳しくお書きください。(回答用紙Aに自由記述)
- (3) (1)で「あまり達成できていない」「まったく達成できていない」と答えた方は、どのようにしたら、それらが達成できるようになるとおもいますか？(回答用紙Aに自由記述)

**■ここからは回答用紙Bにお答えください。**

**問0. あなたの所属・回生・性別について回答用紙Bの該当箇所の○を塗りつぶしてください。教育学部1回生・2回生の方は、入学試験を文系で受けたか理系で受けたかについて、該当箇所の○を塗りつぶしてください。**

**問5. あなたがこの授業を受ける中で、心がけていることや気をつけていることはどんなことですか？(最も当てはまるものを3つまで選び、回答用紙Bの該当箇所の○を塗りつぶしてください)**

- a. 毎回、欠かさず出席するようにしている。
- b. 毎回、能動的に授業に臨むようにしている。
- c. 授業以外でも、自主的に勉強するようにしている。
- d. 自分自身の問題意識と照らし合わせて授業内容を理解しようと努めている。
- e. 積極的に発言し、教員に質問するように心がけている。
- f. 時間内に、自分の疑問点やわからないところをそのままにしない。
- g. 集中して授業を聴くようにしている。
- h. その他 ( )

**問6. 問5で挙げたことに取り組もうとするときに、授業のやりかたや時間の使い方などが今とは違っていればよいと考えることがありますか？工夫・改善した方がよいと思える点について書いてください。(回答用紙Bに自由記述)**

**問7. あなたがこの授業を通して得られていると思うことは何ですか。次の3つの項目ごとに、それぞれ簡潔に書いてください。(回答用紙Bに自由記述)**

- (1) 事前の期待通りに得られていること
- (2) 事前に期待したのに得られていないこと
- (3) 授業前に期待しなかったが結果として得られていること

**問8. この授業について担当教員に伝えたいことがあれば書いてください。(回答用紙Bに自由記述)**

**問9. 昨年までの「学生による授業アンケート」について次の問いに答えてください。**

- (1) 昨年度までで、この「学生による授業アンケート」を回答した回数を回答用紙Bの選択肢から選び、○を塗りつぶしてください。
- (2) (1)について1回以上と答えた方は、そのアンケートを受けたことで自分自身に変化したところがありますか？変化の有無とその具体的内容を記述してください。(回答用紙Bに自由記述)

# 学生による授業アンケート 一回答用紙 (A) ー

問0	所属 (○を一つだけ選択)	<input type="radio"/> 総合人間	<input type="radio"/> 文	<input type="radio"/> 教育	<input type="radio"/> 法	<input type="radio"/> 経済	<input type="radio"/> 理
		<input type="radio"/> 医	<input type="radio"/> 薬	<input type="radio"/> 工	<input type="radio"/> 農	<input type="radio"/> その他 ( )	
	回生 (○を一つだけ選択)	<input type="radio"/> 1 回生 (文系入試)	<input type="radio"/> 1 回生 (理系入試)	<input type="radio"/> 2 回生 (文系入試)	<input type="radio"/> 2 回生 (理系入試)	<input type="radio"/> 3 回生	<input type="radio"/> 4 回生
		<input type="radio"/> 5 回生以上	<input type="radio"/> 修士	<input type="radio"/> 博士	<input type="radio"/> 聴講生・科目等履修生	<input type="radio"/> その他 ( )	
	性別 (○を一つだけ選択)	<input type="radio"/> 男	<input type="radio"/> 女				

問1-(1)	この授業について、	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらともいえない	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない
	満足している (○を一つだけ選択)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	得たものがある (○を一つだけ選択)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
問1-(2)	*役に立った (○を一つだけ選択)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
	「問1-(1) *役に立った」で、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えた場合のみ記述 (自由記述)					

問2	右記の選択肢から	<input type="radio"/> おもしろかった	<input type="radio"/> つまらなかった	<input type="radio"/> 考えさせられた	<input type="radio"/> むずかしかった	<input type="radio"/> 考えが深まった
	当てはまるものを全て選んで下さい	<input type="radio"/> 負担が大きかった	<input type="radio"/> 認識が変わった	<input type="radio"/> たいくつだった	<input type="radio"/> 自分の興味にあっていた	<input type="radio"/> ありきたりだった
	(○をいくつでも)	<input type="radio"/> 視野が開けた	<input type="radio"/> なしめなかった	<input type="radio"/> 熱意が伝わった	<input type="radio"/> ついていけなかった	<input type="radio"/> 惹かれたものがある

問3	「最も」当てはまるもの (○を一つだけ選択)	<input type="radio"/> a	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> c	<input type="radio"/> d	<input type="radio"/> e	<input type="radio"/> f	<input type="radio"/> g	その他 ( )
	「次に」当てはまるもの (○を一つだけ選択)	<input type="radio"/> a	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> c	<input type="radio"/> d	<input type="radio"/> e	<input type="radio"/> f	<input type="radio"/> g	その他 ( )

問4-(1)	問3 で選んだことからの達成度 (○を一つだけ)	<input type="radio"/> 達成できている	<input type="radio"/> まあまあ達成できている	<input type="radio"/> あまり達成できていない	<input type="radio"/> まったく達成できていない
問4-(2)	問4-(1)の理由について詳細に記述 (自由記述)				
問4-(3)	問4-(1)で「あまり達成できていない」「全く達成できていない」と答えた場合のみ記述 (自由記述)				

# 学生による授業アンケート 一回答用紙(B)ー

問0	所属 (○を一つだけ選択)	<input type="radio"/> 総合人間	<input type="radio"/> 文	<input type="radio"/> 教育	<input type="radio"/> 法	<input type="radio"/> 経済	<input type="radio"/> 理
		<input type="radio"/> 医	<input type="radio"/> 薬	<input type="radio"/> 工	<input type="radio"/> 農	<input type="radio"/> その他 (	)
	回生 (○を一つだけ選択)	<input type="radio"/> 1 回生 (文系入試)	<input type="radio"/> 1 回生 (理系入試)	<input type="radio"/> 2 回生 (文系入試)	<input type="radio"/> 2 回生 (理系入試)	<input type="radio"/> 3 回生	<input type="radio"/> 4 回生
		<input type="radio"/> 5 回生以上	<input type="radio"/> 修士	<input type="radio"/> 博士	<input type="radio"/> 聴講生 ・科目等履修生	<input type="radio"/> その他 (	)
	性別 (○を一つだけ選択)	<input type="radio"/> 男	<input type="radio"/> 女				

問5	ここがけていること	<input type="radio"/> a	<input type="radio"/> b	<input type="radio"/> c	<input type="radio"/> d	<input type="radio"/> e	<input type="radio"/> f
	(○を三つまで選択)	<input type="radio"/> g	<input type="radio"/> h	その他 ( )			

問6	問5のことがらに取り組み際に工夫・改善した方が良いと思うこと (自由記述)	
----	--	--

問7-(1)	事前の期待通りに得られていること (自由記述)	
問7-(2)	事前に期待したのに得られていないこと (自由記述)	
問7-(3)	授業前に期待していなかったが結果として得られていること (自由記述)	

問8	担当教員に特に伝えたいこと (自由記述)	
----	-------------------------	--

問9-(1)	昨年度までに、この『授業アンケート』に回答した回数 (○を一つだけ選択)	<input type="radio"/> 0 回	<input type="radio"/> 1 回	<input type="radio"/> 2 回	<input type="radio"/> 3 回以上	
問9-(2)	問9-(1)で「1回以上」と答えた場合のみ、『授業アンケート』回答による自分自身の変化 (自由記述)					

## ■編集後記

今年度の学生による授業評価アンケートは、今年度の自己点検・評価委員会のメンバーである稲垣恭子・田中耕治・齊藤智の3名が担当した。今回は、前回の手続きを踏襲して実施したこともあって比較的順調に進行することができたが、質問項目の作成や分析について相互に検討していくなかで、本研究科の授業の特徴やその利点を認識し直したり問題点や課題を発見するなど、委員としてだけでなく教育学部で教育・研究に携わるものとしてもさまざまな角度から議論し合う機会になった。またとくに今年度は自己点検・評価報告書の作成年度とも重なっていたため、本研究科全体の教育や課題と照らし合わせる視点がより意識されたかもしれない。

結果の分析は斎藤准教授を中心に行なったが、前回もお世話になった中池竜一助教にかなりの時間と労力を割いていただいた。データやグラフ作成を含むきめ細かい作業から報告書作成の手続きまで全面的な協力を得られたことは大きい。改めて感謝申し上げたい。

最後に、この調査に参加・協力していただいた多数の学生・院生の皆さん、本アンケートの対象授業として、授業時間を使って全面的にご協力いただいた教員の皆さんに、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

(稲垣 恭子)